

林雄一郎基金

ミッション策定プロジェクト

REPORT



目次

リサーチ部メンバー紹介	4
林雄一郎基金ミッション	7
有識者ヒアリング	10
ロジックモデル研修	42
ミッション策定会議	45
リサーチを振り返って	49

早稲田小劇場どらま館では、かつて早稲田大学の劇団「自由舞台」に所属していた林雄一郎氏による寄付をもとに、「林雄一郎基金」を設立。そして2025年度、この基金を効果的に運用したプログラムを展開するために、基金としてのミッションを策定しました。

このミッション策定に向けて組織されたのが「どらま館リサーチ部」です。演劇、ダンス、大学、地域社会など、さまざまなフィールドで活動する6人で構成されたりサーチ部では、演劇のみならず、福祉、教育などの有識者に対するヒアリングや、月例ミーティングにおける討論の実施、そしてどらま館の参与でもある柴田英杞さんを迎えたロジックモデル研修への参加などを行いました。これらの活動から得られた知見を共有し、「いま求められる劇場の形とは何か?」「どのように地域との関わりを生み出すか?」といった討論を重ねた上でつくられたのが、「早稲田の森にさまざまな火が灯り、囲まれ、分けられていく」というミッションです。

しかし、策定されたミッションを使いこなしていくためには、この言葉を共有するだけでなく、それが生み出された過程をも共有していく必要があります。この報告書では、ヒアリングやミーティングの内容を要約しつつ、ミッション策定までのプロセスを記録することで、今後、早稲田小劇場どらま館や林雄一郎基金に関わる人々にとってミッションを理解する手がかりとなることを目指しています。

は
じ
め
に



萩原里砂

早稲田大学職員。2025年6月文化推進部文化企画課着任。その前はG C C (GlobalCitizenshipCenter) オフィスで、地域や企業と連携して社会課題を検討するPBL型の準正課ワークショップや、ガラス張りのコミュニティスペース【G C C コモンルーム】の企画・設計に携わる。その関係もあり、どらま館でできないことはG C C コモンルームでやれないかと前任箇所のメンバーに圧をかけがちである。現在、法政大学大学院キャリアデザイン学研究科に在籍し、修士論文苦悶中。



呉宮百合香

早稲田大学文化構想学部卒業。パリ第8大学（芸術学）および早稲田大学（文学）で修士号を取得後、早稲田大学文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。研究・批評の視点を基盤に、現在はダンスを中心とした公演・展示・フェスティバルの企画・制作に携わる。また横浜市の舞台芸術創造拠点「急な坂スタジオ」のプログラム・ディレクターとして、稽古・試行・対話の場を支える企画運営や、創造環境の整備、地域との接続に取り組んでいる。日本大学芸術学部演劇学科非常勤講師。DEZAR inc. 共同代表。



萩原雄太

演出家、かもめマシーン主宰。主な作品に、『福島でゴドーを待ちながら』、『俺が代』、『電話演劇シリーズ』など。18年、ベルリンで開催された Theaterreffen International Forum に参加。19-20年、22-23年、24-25年セゾンフェロー1に採択。23年、Asian Cultural Council New York Fellowship に採択され、NYに滞在。ジョージタウン大学・Laboratory For Global Performance & Politics 2024-2026のGlobal Fellowに採択される。



宮崎晋太郎

早稲田大学第一文学部演劇映像専修卒業。企画制作。社会福祉士。俳優経験を経て、早稲田小劇場どらま館で企画制作を担当。劇場という場がひとの暮らしといかに結びつくかを問うなかで、文化事業を福祉の視点で捉え直すことに関心を持つ。

現在は、「最も身近な他者としての自分」（尹雄大）と深く付き合うことを探求の軸としながら、「聞く」ことを中心とした暮らしと文化のつながりを再設計することを目指す。



森下ことみ

1998年、「三鷹市 SOHO パイロットオフィス」のスタッフとして場作りに関わる。2003年、同市から受付業務を受託し創業。2013年、高田馬場駅前にシェアオフィス&コワーキングスペース CASE Shinjukuを開業、2014年からは新宿区立高田馬場創業支援センターの管理運営として創業支援などを行う。2018年、WEBメディア「高田馬場経済新聞」で高田馬場・早稲田エリアで活躍する人々に出会いその情報発信を行う。



吉田恭大

1989年鳥取市生まれ。早稲田大学文学部演劇映像コース卒業後、北千住 BUoY、吉祥寺シアター他、劇場や文化施設の企画運営に携わる。在学中は劇団森、短歌会に所属。歌集に『光と私語』（いぬのせなか座）、『フェイルセーフ』（KADOKAWA）2023年10月よりどらま館劇場制作マネジメントとして勤務。

リサーチ部タイムライン

			ヒアリング	ミーティング	研修	
2025年	10月	13日		キックオフミーティング		
		26日			ロジックモデル研修 (1回目)	
11月	4日		犀の角 荒井洋文さん			
		10日		月例ミーティング		
		26日	NPO法人アーツセンターあきた 三富章恵さん			
12月	2日		こはぜ珈琲 谷川隆次さん			
		16日		月例ミーティング		
		20日	森のピッコロようちえん 中島久美子さん			
2026年	1月	19日	京都市立芸術大学 小山田徹さん			
	2月	3日		ミッション会議		
		23日			ロジックモデル研修 (2回目)	
	3月	10日			ミッション会議	
		14日		NPO法人抱樸 奥田知志さん		
			16日			最終報告

林雄一郎基金ニツシヨ

早稲田の森にさまざまな火が灯り、 囲まれ、分けられていく

異なる他者とともに、いまとは別のあり方を想像し、受け取りあい、試しあえる場を開く。大学とまちにそうした関わりを少しずつ引き受けていける小さな火を増やし、自由と自治を育む。

早稲田大学の校歌「都の西北」は、「都の西北 早稲田の森に」という言葉からはじまります。わたしたちは、これを文字通りの意味で「森」と受け取る場所から、このミッションをはじめたいと思います。

いったい、森とはどのような場所でしょうか？

そこは、数多くの動物、植物、微生物、菌類が息づく場所。かれらが相互に関わることによってひとつの生態系をつくり、命が循環している場所です。そこは、生まれ、育ち、老い、死ぬ場所です。小さな動物たちにとって、そこは隠れ家となるでしょう。それと同時に、捕食される危険もはらむ場所でしょう。そこは、互いが互いに贈与しあい奪いあい、助けあい、衝突しあい、連鎖しながら暮らしていく場所ではないのでしょうか。そのようなかわりの網の目が、大学のみならず、地域社会を含む「早稲田」に広がっている。

では、その森では、どのような営みが行われているのでしょうか？

わたしたちは、そこに「火」のイメージを託しました。

早稲田の森で生み出されるさまざまな火。そこには種火もあるし、松明もある。炭の熾火（いこり火）、あるいは、焚き火も、キャンプファイヤーもあるかもしれません。そこに灯されるひとつひとつの火は、ひとつひとつとして灯るとともに、暖かな火が別の誰かを呼び寄せたり、暗闇を照らすこともあるでしょう。この火を囲んで対話が生まれたり、歌い、踊ることもあるかもしれません。

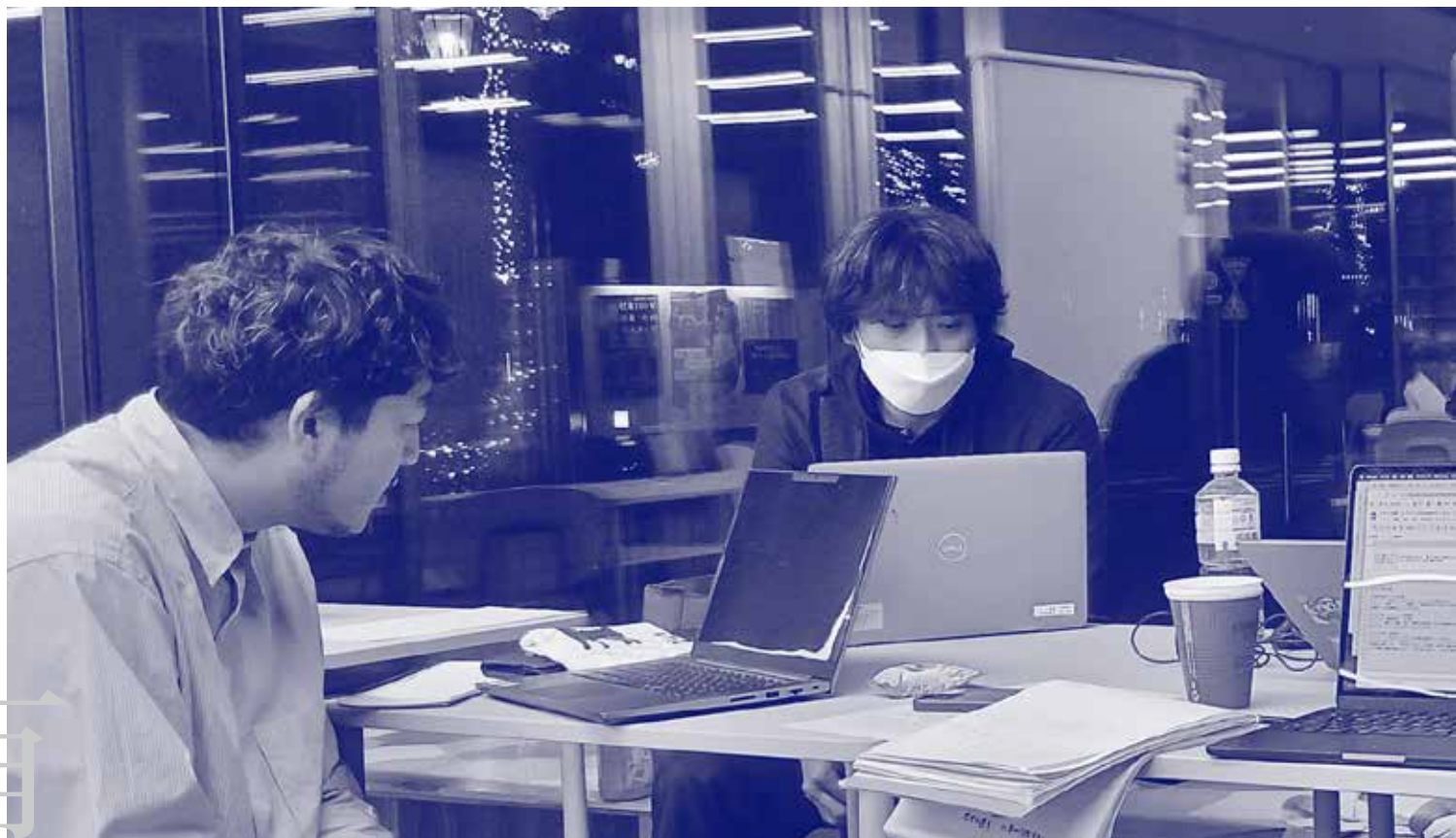
そのような恩恵を受ける一方、火は全てを焼き尽くす力をはらんでいます。この内在する力を扱うためには、高い知性と技術と、コツが必要となる。時にボヤを起こしながらも、この森では、火の扱い方を学んでいくのです。

わたしたちは、早稲田の森で火を手に入れ、その火を囲みます。火は、このようにして人々の共有物となるとともに、べつの誰かに分けられ、早稲田の森の外に出て、日本各地、あるいは世界各国へと広がっていくでしょう。

さらに、このミッションに付帯することばとして、わたしたちの理想とするあり方を、より具体的なテキストへと落とし込みました。

ヒアリングやディスカッションを経て、わたしたちが見つけた劇場の役割は「異なる他者とともに、いまとは別のあり方を想像し、受け取りあい、試しあえる場を開く」こと。それは、「表現の場」としての劇場であるのみならず、「共生の場」であり、「贈与の場」であり、「相互作用の場」であり、「レジリエンスの場」としての劇場の姿を指しています。そのような過程から生まれた小さな火を引き受けられる場が、まちに、大学に、社会に無数につくられていく。これを通じて、人間にとって不可欠な自由と、わたしたちが、わたしたちとして生きていくために必要な自治の空間を生み出していきたいと考えています。

どらま館リサーチ部



有識者ヒアリング

犀の角
NPO 法人アーツセンターあきた
こはぜ珈琲
森のピッコロようちえん
京都市立芸術大学
NPO 法人抱樸

荒井洋文さん
三富章恵さん
谷川隆次さん
中島久美子さん
小山田徹さん
奥田知志さん



前掲のミッションを策定するにあたって、リサーチ部ではさまざまな有識者に対するヒアリングを実施しました。

社会のなかにおける「舞台芸術」の位置づけは大きく変わり、それに伴って劇場に求められる役割も変わっています。「集まりの場としての劇場」、「コミュニティを生み出すための劇場」、「教育のための劇場」、「まちづくりのための劇場」、そして「能動性を発揮するための劇場」。これからの劇場を考えるための上で必須となる思考に補助線を引くべく、舞台芸術、福祉、教育、地域など、さまざまなジャンルの人々にお話を聞きながら、いま早稲田において、ほんとうに必要な劇場の姿を考えていきました。

ここでは、1時間から2時間におよんだヒアリングの内容の一部と、月例ミーティングのなかで報告された担当者からのコメントを掲載。ヒアリングの内容とともに、リサーチ部の面々がどのようにそれを受け止めたのかを記録していきます。



「なんでも受け入れる」犀の角のスタイル
犀の角 荒井洋文さん

2025年11月4日
ZOOMにて

「犀の角（さいのつの）」は、長野県上田市の商店街の一角につくられた客席数およそ 60 席の小劇場。これまで、地元上田のみならず、全国各地・世界各国から劇団の公演を受け入れてきました。また、劇場とともに、カフェやゲストハウスを運営。さらに、2020 年のコロナ禍以降は NPO 法人場作りネットとともに、困難を抱えた人がゲストハウスに安価で泊まることができる「やどかりハウス」というプロジェクトにも取り組んでいます。

地域文化のハブであり、人々の居場所であり、福祉領域にも手を伸ばす場所であり……。「変な人でも住みやすい街に」をミッションに掲げる犀の角は、いま、ほかのどんな劇場でもできなかった場づくりを行っているのです。

もともと、静岡県舞台芸術センターに勤務していた荒井さんが、実家のある上田市の中心地・海野町商店街に犀の角をつくったのが 2016 年のこと。ひょんなことから築 50 年の古いビルに出会った荒井さんは、この建物をリノベーションし、カフェ、ゲストハウス、劇場という 3 本柱で展開する事業に乗り出します。しかし、いざ工事をを行うと、いくつもの問題が勃発しました……。

「小劇場をつくる場合、普通はブラックボックスの空間に、照明のグリッドが設置されている姿を思い浮かべますよね。しかし、工事にあたってまず直面したのが、床がフラットではないこと。以前のテナントで床に配管を通していて、空間の一部が 30cm ほど上がっていたんです。これをフラットにするための工事費は 100 万円……。もうひとつ、大きな問題となったのが窓の存在。商店街に向けて開いた大きな窓は、カフェにとっては魅力でも、暗転を必要とする演劇公演にとっては邪魔な存在。そんな困難に向かい合っていると、『いったい、自分はどんな空間をつくりたいんだっけ?』という疑問が湧いてきました」

床に段差があり、外からの光も入ってくる。小劇場としては使い勝手の悪い空間だったものの、荒井さんは熟慮の末、「そのまま」使うことを選びました。床は上がったまま、窓にいたっては、むしろ以前よりも拡大してしまったそうです。

「床に段差があっても劇場になるし、窓から光が差し込んでも劇場になる。それで演劇が上演できないなら、暗幕で遮光をすればいいだけ。

そうやって柔軟に考えられたのは、日本の劇場史を勉強したことも大きかった。西洋型の劇場は、外界と遮断された空間でイリュージョンを生み出します。しかし、舞台用語で劇場を『小屋』と呼ぶように、日本の劇場は仮設でつくられた風通しのいい空間です。自分がつくりたいのは、そんな空間なのではないか。そう考えたら、むしろすべてを受け入れていこうという考え方になったんです」

なんでも受け入れる風通しのいい空間。そこで生まれるのは、教える／教えられるといった非対称的な関係ではなく、お互いがお互いを触発するような関係性です。犀の角では、観る側と観られる側が分けられないイベントが多いと荒井さんは話します。

「演劇が上演される時、そこには舞台と客席との交流が生み出されますよね。それに加えて、隣の人と肩を寄せ合いながら芝居を見ることによって、観客同士の交流も生まれる。いくつもの交わりのなかで生み出されるのが、演劇を見るという体験なんです」

コロナを契機に 生み出された「即興劇」

こうやって、2016 年から営業を開始した犀の角。演劇だけでなく、音楽ライブや落語なども開催し、地元の人々にも「よくわからない場所」としてだんだんと根付いていきました。しかし 2020 年、開館から 5 年目を迎えた犀の角を、パンデミックが襲います。他の多くの劇場と同様に公演がキャンセルとなり、犀の角に足を運ぶ人はパタッと途切れてしまいました。「劇場では公演はもちろん稽古もできないし、カフェにも人が来ないし、ゲストハウスにも誰もいない。もう、空っぽでした。でも、そんな誰もいない空間にやってくるようになったのが、少し汚れた身なりをしている包丁研ぎのおじさんと、近隣の歓楽街でキャバクラ嬢として働いている女の子でした」

彼らは、誰もいない店内で何をやるわけでもなく、

ぼーっと過ごしたり、ときには眠りこんでしまったり。他の利用者のいない犀の角は、かれらにとって貴重な居場所となりました。

「かれらを見て、上田の中に、人々の居場所となる空間をつくらなければいけないのではないかと考えました。そして、映画館や福祉施設などと連携してつくったのが『のきした』というプロジェクトです。これは、街の中に『雨風をしのぐ場』として、誰でも使える居場所をつくる取り組み。さらに、ここから派生して、NPO 法人場作りネットと共同で犀の角ゲストハウスを使った取り組みが、『やどかりハウス』でした」

困難を抱えた人がゲストハウスに1泊1000円（事業開始当初は500円）で泊まることのできる「やどかりハウス」。2020年の開始以来、DVや孤立、困窮で、誰にも頼れず生きづらさを抱えた、10代から中高年まで900人以上が利用してきました。

「そもそも、舞台作品を上演することだけが劇場の役割ではないと思います。大きな窓から犀の角の中を見れば、そこで行われているあらゆることは演劇のように見えるでしょう。

コロナ以降も舞台作品の上演は続いています。それに加えて『のきした』や『やどかりハウス』など、別の『劇』が始まったような気がしています。キャバクラの女の子や包丁研ぎのおじさんがいる横で、やどかりハウスに相談に訪れる人と、その相談を真摯に受け止めるスタッフたちがいるんです。

話している人、聞いている人、あるいはそこで過ごしている人、それぞれに応答関係が生まれている状態



は、『劇』そのものと言えるでしょう。相談を受けている人が勇気づけられ、その雰囲気によって別の人が影響され……、まるで濃密な即興劇のように、お互いがお互いを触発し合い、変容し合いながら過ごしているんです」

コロナ禍以降、犀の角で「上演」されるようになった、新しい「劇」のかたち。それは、犀の角やそのコミュニティを活性化させるばかりでなく、困窮者の支援に対して、行政では果たすことのできなかった役割を果たしているのではないかと荒井さんは話します。「これまで、困窮者の相談支援は病院や行政施設といった然るべき場所に限られてきました。そういった場所では、静かで落ち着いた環境を提供できる一方で、医者／患者、相談者／相談を受けるスタッフ、支援する人／支援される人など、役割を固定化してしまいます。しかし、犀の角のように緩やかな場所を持つ雰囲気は、相談を受ける相談員が『俺もしんどい』ということも許される。わたしたちはなんの資格も持っておらず、支援のための責任すら負っているわけではありません。しかし、犀の角に『あそび』があり、自由度が高い場所だからこそ、このようなプロジェクトができるんです」

犀の角が持つ自由さ。荒井さんが、その具体例として挙げるのが、やどかりハウスを運営する元島生（もとしましょう）さんの存在です。アーティストであり、詩人でもある元島さんは、相談を受けていたと思ったらギターを弾きはじめてしまうといいます。

「人間にはいくつもの側面がありますよね。元島さんの場合は、相談員としての側面もあれば、アーティストとしての側面も両方を持っている。いま、社会ではひとつの顔を守らなきゃいけないという強迫観念が強くなっているように感じますが、どんな側面であっても許容される場所こそが、いま必要なんじゃないか。犀の角では、そういう場所をつくろうとしているんです」

みんなで困り続けること

床の段差も、大きな窓もそのまま受け入れたように、犀の角は、訪れる人のありのままをできるだけ受け入れようとしています。しかし、世の中にはさまざまな人々が暮らしています。中には、「招かれざる客」もいるのではないのでしょうか？

「カフェをやっているんで、たとえば、不衛生な人に来られたら困りますね。また、やどかりハウスでは、滞在日数の上限を設定しているにもかかわらず、それを破って居座り続けようとする人や、いったん出てもすぐに戻ってしまう人もいます。そういう人には困られます。

そんな、解決できないような問題の対処法ですか……？ それは特にありません。ただ、みんなが『困ったね』と言い合っているだけ。ひとりで困るのではなく、みんなが『はあ……』『どうしようか……』って困り続けることで、問題をひとりで抱え込まないようにしているんです」

解決できない問題を無理やり解決しようとするのではなく、いっしょに困ってみる。それはピッコロようちえん（P27）にも似たスタンスといえるでしょう。そうやって、みんなため息をついてきた荒井さんをはじめとするやどかりハウスの人々はいま、「劇団やどかりハウス」というアイデアを温めていると話します。「どうにもならない問題を抱えている人たちと向き合い続けていると、こちらも引きずられて、どうにもなくなってしまう。だから、支えたり、支えられたりするような関係だけではなく、別の目標をつくって、それを共有しながら一緒にいる状況をつくりたい。それは、まるでひとつの作品に向かって進んでいく『劇団』のような関係性です。

もちろん、そこで果たされるのは演劇作品の創作でなくていい。月1回集まってご飯食べるだけでも、一緒に作って食べて片付けて帰るだけでもいいんです。そうやって目標を共有することで、お互いに苦しくない程度の距離を保ちながら関わりを生み出せるのではないかと思います」

演劇を生み出すには多くの役割が必要となり、そのなかで関わりが生まれます。『劇団やどかりハウス』が求めるのは、そんな関わりのあり方でしょう。建物

を受け入れ、人を受け入れ、いくつもの困難に対して、乗り越えるのではなく「困ったな」とため息をつきながら付き合ってきた犀の角。荒井さんのお話からは、犀の角が大切に「劇」のあり方が見えてきました。

荒井 洋文

（プロデューサー、舞台芸術制作者、犀の角代表）

長野県上田市出身。静岡県舞台芸術センター制作部に所属後、上田市で文化事業集団「シアター&アーツうえだ」を発足。演劇を軸とした文化芸術活動のプロデュースを行っている。2016年、上田市中心商店街の空き店舗をリノベーションし、劇場とゲストハウスを備えた民営文化施設「犀の角」をオープン。様々な表現活動や地域住民・アーティストの交流の場として運営している。近年はアーティスト・イン・レジデンスに重点を置いた事業や劇場の役割の捉え直した居場所作りなどの事業を展開。上田市交流文化芸術センター運営協議会委員。令和5年度（第74回）芸術選奨芸術振興部門において文部科学大臣賞受賞。

ヒアリングを通じて

荒井さんの語りには、その場の景色が浮かんでくるような具体性がありました。犀の角の窓ガラス越しに街を眺めると、そこに演劇が潜んでいる、と荒井さんは言います。街の通りから犀の角を見て「変わった空間だな」と感じるのと同じように、ガラスの内側から街を眺めても、日常のやり取りのなかにドラマは宿っている。

コロナ禍をきっかけに犀の角に集まる人の顔触れは変わり、場所の意味までも変わっていきました。そうした変化になぜ犀の角は応じることが出来たのか。それは荒井さんに、劇場とはそもそも「凸凹な存在がいられる居場所である」という確信と、通りを行き交う街の人の存在にドラマを見出す眼差しがあったからではないかと感じます。

どこか世間に馴染めない人も、居場所がない人も、ここなら集まれる——そう感じさせる場所が、自分の生活の近くにあるだろうかと考えると頼りない気持ちになります。人々が問題を解決するのではなく、みんなで困り、みんなのため息をつく。そうやって生まれる安心感を潜在的に必要としている人が、きっといると思います。

やどかりハウスの取り組みも、とても印象

的でした。彼らが掲げる「助かり合うわたしたち」という言葉には、演劇的な構造を感じます。福祉的な取り組みにおいて、支援する／されるという固定された役割から降りて、「助かり合う」という関係性を模索する。役割や規則が振る舞いだけでなく感情にまで作用することは、俳優であれば肌感覚として理解できるんじゃないかと思います。

だからこそ、居場所をつくるために「人（の考え方）を変えない」という荒井さんの言葉は、重く響きました。前提条件なしに、ただそこにいられること。自らの意志で役を着たり降りたりしながら集まりに参加することは、これまでとは異なる意味での「公共」、あるいは「演劇」を考える運動ではないかと感じます。犀の角の根底に演劇的風土が培った眼差しが息づいているのだとしたら、ぼくら演劇人にできることが、まだあると思いました。



担当：宮崎



能動性を促す秋田市文化創造館の取り組み
NPO 法人アーツセンターあきた 三富章恵さん

2025年11月26日
ZOOMにて

2021年、秋田市の中心市街地にオープンした「秋田市文化創造館（以下、文化創造館）」は、全国でも珍しい文化施設といえるかもしれません。「秋田に暮らす人のために、自分らしい表現を探す人のために、新しい活動を生み出す拠点」とコンセプトに定められているように、この施設はコンサートや公演などの「鑑賞」ではなく、そこに集う人々が自らの想像力を駆使して「創造」を行うことに注力しています。これまでダンスや工作、3Dプリンタ、リソグラフなどのワークショップ（以下、WS）などに加えて、民具収集家の話を聞く会、夏野菜の栽培、漬物WSなど生活に密着した「創造」まで、さまざまな事業が展開されてきました。

NPO法人アーツセンターあきたで事務局長を務める三富章恵さんは、2018年、このNPO法人の立ち上げに合わせて秋田に移住してきた人物です。

「アーツセンターあきたでは、開館準備の段階から文化創造館に携っており、開館後には指定管理団体として運営を任されています。開館準備としては、専門家に対するヒアリングや市民参加のWSなどを行いながら、運営管理計画をつくりました。WSには10代から80代まで幅広い人々に参加してもらい、その属性も大学生、会社員、文化芸術関係者など多岐にわたります。特に、初回は注目度も高く、74人もの方々に参加してもらいましたね」

また、開館後の利用を見越してこのWSにはいくつかの仕掛けを用意していた、と三富さんは振り返ります。

「普通に参加者を募集しても、文化に関心のある市民にしか届かない。いろいろな方々の意見を聞くためにも、地元商工会の若手、スタートアップの起業家など、文化創造館の開館を知らない人々にこそ積極的に声をかけたんです。また、WSの運営補助として、秋田公立美術大学や秋田工業高等専門学校にアルバイトとして入ってもらいました。かれらは開館後も文化創造館に対して関わってくれるであろう人々。実際、開館後にも、仕事をサポートしてくれたり、館を使ってイベントをしてもらおうなど、継続的な関係を保っています」

では、このWSは、どのような内容だったのでしょうか？ 三富さんの印象に残っているのが、文化創造館を擬人化するワーク。「文化創造館が人間だったとして、どのような人だったら付き合いたいと思いますか？」という質問が参加者に投げかけられます。

「『どんな施設ができれば嬉しいですか？』と直接的に問われても、どう答えればいいのかわからないですよ。そこで『擬人化』した質問を投げると、『包容力があるほうがいい』とか『悩みが相談しやすいと付き合いたくなる』など、いろいろなキーワードが生まれました。ここで出されたキーワードが、運営管理計画の策定や、運営方針にも活かされています」

大ヒットした「カタルバー」

文化創造館では、市民が活動を展開しやすいように、館内の空間を1㎡/時あたりわずか5円で借りることができます。ホールや会議室のみならず、ウッドデッキや芝生スペース、エレベーターホールに至るまでこの金額で利用することができる。そんな利用しやすい環境は、人々の創造を後押しします。

開館後、従来型の文化施設とは大きく異なったコンセプトは全国的に注目を集め、文化関係者を中心に広く知られる施設になった文化創造館。2025年には、優れた公立文化施設を顕彰する「地域創造大賞（総務大臣賞）」も受賞しました。

「当初から、文化創造館は、アマチュアの文化芸術団体のためだけのものではないし、美術大学の学生たちだけの施設でもないと考えてきました。公共施設であることを意識して、できる限り間口を広げ、多くの方々に使ってもらいたいと考えています」

文化創造館の間口の広さを象徴するイベントが「カタルバー」と呼ばれる誰もがホストになれるトークイベント。ZINEをつくるための相談会、朗読をする会、旅行の思い出話をするための会など、どんな話題でもゆるやかに語り合えたり、やってみたかったことを試せるこのイベントには、これまでに、およそ300人が一日店主として参加してきました。

『カタルバー』は、気軽に始めたプログラムだったにもかかわらず、思いもよらぬ大ヒットとなりました。さまざまな人がトピックを持ってきてくれるし、どんな話題であっても必ず足を運んでくれる利用者もいます。一般的に、秋田の人はシャイで、表立って心の内を話したがるなと言われていたのですが、地元の人からも『こんなに話したい人がいるなんて、信じられない!』と驚かれますね」

このカタルバーを巡って、2024年7月、象徴的な「事件」が起きました。それまでは特に日付を決めずに、「話したい」という人が現れたら不定期で開催していたものの、毎週水曜日の定期開催へと変更。すると、利用者から予期せぬ反発が起こったのです。「それは『自分の場所を奪わないでほしい』という、カタルバーの常連たちからの反発でした。かれらにとって、カタルバーは文化創造館のイベントというだけでなく、自分の居場所だったんです。

そこで、かれらがとった行動が、文化創造館が手掛ける公式のカタルバーではなく、非公式の『野良カタルバー』の開催することでした。いまやカタルバーは、文化創造館の中だけでなく、秋田県内各地、あるいはほかの都道府県でも開催されるようになっていきます」

では、カタルバーをはじめとする文化創造館が提供するプログラムは、秋田にどんな変化をもたらしているのでしょうか？ そんな質問を投げかけると、三富さんは、ある常連利用者の事例を共有してくれました。「すでにリタイアされているある男性は、あまり地域社会にもなじめないタイプ。彼は、文化創造館のス

タッフと長い時間おしゃべりすることを楽しんでいました。ただ、彼と話をすると、かなりの長話になってしまい、一部のスタッフの間ではちょっと『困った人』という認識がありました。

しかし、話をしているうちに、この方が、文化創造館内で野菜を育てる『おやさい隊』に加わったり、レジデンスしているアーティストのWSに参加したりと、だんだん館の事業に参加してくれるようになっていきました。すると、スタッフだけでなく、いろいろな人とコミュニケーションを取るようになり、主体的に行動するようになっていった。スタッフとのコミュニケーションを通じて社会とのつながりを獲得し、文化創造館のプログラムにも参加するようになった。社会での居場所を見つけられたんだと思います」

能動性の引き出し方

ところで、受け身で鑑賞をするだけではない文化創造館において、利用者に求められるのが創造するための能動性。とはいえ、そんなチカラは誰もが簡単に獲得できるものではありません。いったい、文化創造館のスタッフたちは、どのようにして利用者の能動性を引き出しているのでしょうか？ そんな質問に対して、三富さんは「まだ十分に言語化できていないのですが……」と前置きをしつつ、次のような方法を話しました。

「利用者の能動性を引き出すために、いちばん効果的なのは、相談を持ちかけられたスタッフが丁寧に話を

聞き、応援をすること。やりたいことに対して興味を持って応援する姿勢が、利用者の能動性をサポートしている。そうやって、会話を重ねることで『他の人は誰も興味を持ってくれなかったのに、文化創造館やそのスタッフなら興味を持ってくれる』という信頼が生まれます。

ただ、他の業務との兼ね合いもあるし、無限に利用者の相談を聞くことはできませんよね。しかし最近、そんな限界を拡張するようなおもしろい動きが生まれつ



つあります。

初心者の利用者による『使いたい』という相談を、常連の利用者さんが買って出ってくれるようになっているんです。イベントをやってみたいという人がまず常連の利用者に相談し、企画が固まると文化創造館のスタッフのところによってくる。そんなコミュニケーションが生まれはじめているんです」

スタッフや常連らが話を受け止めることによって、利用者の能動性は後押しされる。一方、それを支えるスタッフ自身の能動性も、施設内にいくつかの仕組み

を用意することによって生まれているといいます。たとえば、オフィス内にホワイトボードを設置するのも、そんな促しのための方法です。

「『文化創造館でこんなことできたらいいな』っていうアイデアを、オフィス内のホワイトボードにどんどん書いてもらっています。一番最前線で利用者とふれあい、そのニーズに接するのは相談に対応するスタッフ。相談の会話にこそ、新たな企画のヒントがいくつも含まれているんです」

話に耳を傾けることで関わりが生まれ、その関わりから能動性が生まれていく。そして、能動性が企画を生み、いくつもの企画がまちの文化を生み出していく。あえて「鑑賞」ではなく「創造」にフォーカスをした文化創造館は、そうやって、まちの未来を作ろうとしているのです。



文化創造館で行う「おやさい隊」の様子

三富章恵

1981年静岡県生まれ。名古屋大学大学院国際開発研究科修了。2006年より、独立行政法人国際交流基金に勤務し、東京およびマニラ（フィリピン）において青少年交流や芸術文化交流、海外における日本語教育の普及事業等に従事。

東日本大震災で被災経験をもつ高校生・大学生や児童養護施設に暮らす高校生のリーダーシップ研修や奨学事業を行う一般財団法人教育支援グローバル基金での勤務を経て、2018年より現職。

ヒアリングを通じて

三富さんのお話でアートセンターあきたの「場のしつらえ」の工夫の一つ一つを伺うたび、リサーチ部の全員が唸らされていた。

開館準備段階での「文化創造館を擬人化してみる」というワークショップや、利用者のサポートのための手厚い人員配置など、どれもコミュニケーションを続けることを前提とした設計がなされている。それらは利用者の能動性を促すための仕掛けであると同時に、館としての、またそこで働く職員自らの能動性もデザインに組み込まれているところに、これからの文化施設としてのポテンシャルを感じた。ただ施設を作るだけでなく、そこで人と人が関わり、創造を続けるための、継続性と発展性を織り込んだ場のしつらえ。翻って、今の私たちやこれからのどらま館では何が出来るだろうかを考える。まずは現場でホワイトボードを共有するところから始めたい。



担当：吉田



背中を押すためにできること
こはぜ珈琲 谷川隆次さん

2025年12月2日
こはぜ珈琲早稲田店にて

「早稲田小劇場どらま館」という名前の由来にもなっている「早稲田小劇場」は、演出家の鈴木忠志さんと劇作家の別役実さんによってつくられた劇団の名前。かれらが劇団の総会を行ったり、たまり場として使っていた喫茶店「モンシェリ」の店主・田久保義男さんは、その熱量に魅力を感じ、破格の値段で店舗の2階をアトリエとして貸し出します。そして、ここから日本演劇史に残る数多くの名作が生み出されていったのです。

演劇に限らず、さまざまな文化は「たまり場」となる場所とともにつくられてきました。そこで交わされる会話から発想の種が生まれ、新たな企画が育まれていく。オンラインコミュニケーションが発達した現在でも、そのような「場」の存在が文化にとって不可欠であるのは、多くの人が同意するところでしょう。

早稲田にある「こはぜ珈琲」は、自家焙煎豆の販売とコーヒーの提供を行う喫茶店。下北沢にて、名前を変えながらおよそ18年間営業してきたこはぜ珈琲は、2021年、大隈通り商店街に2号店をオープンしました。客席数は23席。決して広いとは言えない店内ですが、通常営業の他にも、落語会やスタンダップコメディ、浪曲といったイベントを積極的に開催しています。ここでは、早稲田に住む人々と、早稲田大学に通う学生たちが交差し、新たな動きが生み出されているのです。

もともと、店主の谷川隆次さんは、早稲田大学の演劇サークル「演劇倶楽部」などで外部スタッフとして公演のサポートをしていた人物。卒業後もしばらくフリーランスで小劇場演劇を中心とする制作業務を行っていたものの、体調を崩して演劇の世界から遠ざかります。それ以降、カフェを運営しながら街とイベントをつなぐ「遊び」をするようになったそうです。

「下北沢の店舗では、店内音楽ライブや路上ライブ、マルシェなどを企画してきました。しかし、2021年、コロナ禍の只中にオープンした早稲田店では、なかなか大きなイベントはできなかったんです。でも、近所の人が集まり、顔が見える人間関係のなかであれば、イベントをしても大きな問題にならないのではないかと考え、空気清浄機を入れて、席の間を空けながら、

小さな落語会をはじめました。

そうやって始まった落語会は、いまだに毎月開催していて、40回以上を数えています。イベントの常連になった人もいて、近所のおばあちゃんが、新宿や上野の寄席に行くことができないけれども、うちであれば近所だから歩いて来れると喜んでいます。そして、落語会の何人かの常連が車を手配し、このおばあちゃんを連れて落語を見に行くというイベントも企画してくれました」

背中を押すことの大切さ

自らの性格について「おもしろいことをいちばん近くで見たい人」と分析する谷川さん。落語会を通して関係が生まれ、その関係が別の関係へと発展するように、彼は、周囲にいるおもしろい人をけしかけ、新しい動きを巻き起こそうとする。そして生まれた熱量をニコニコと眺めているのです。

「『やりたいことがある人を応援したい』っていうほど大げさなことではないんです。やりたいことがある人がいて、やれる場所があるならば、やってみたほうがおもしろいっていうだけ。絵本作家の夢を持つスタッフがいます。『ステッカーをつくってよ』という話から始まり、いろいろなグッズにイラストを描いてもらうようになりました。そして、イラストが店の中で使われ、いろいろな人の目に触れることになると、それを見た人が別の仕事を依頼する。そうやって、やりたいことが現実化していくことを見ているのがおもしろいんですね。

また、ある卒業したてのまだ若い子は、コーヒーが好きで、将来は喫茶店をやりたいという相談を受けました。そこで、今度、1日だけ店を使っていいから企画を持ってきて、と話しています。そうやっていっしょに企画を練り上げながら、『よかったじゃん』と言ってあげられる関係性をつくれるのが理想的ですね」

そんな谷川さんの姿勢は、自分自身が若い頃、年長の人々から背中を押されてきたことから育まれてきたといいます。谷川さんは2016年、それまで所属していたコーヒーチェーンから独立。その時に、背中を押

してくれたのが、俳優の柄本明さんと角替和枝さんの夫婦だったと振り返ります。

「『あんたがやってる店なら大丈夫。お客さんが来ないなら、私たちの名前を使っていいよ』って背中を押してくれたんです。じつは、先日、下北沢店の移転を記念して閉店・移転までの1ヶ月を描いた映画を作ったのですが、ここにも次男の柄本時生さんに出演してもらうなど、いまだに家族ぐるみでお付き合いをしています」

すると、騒音の苦情が舞い込んでくる。一応、私道だから法的には問題がないんですが……。早稲田でも、いろいろなイベントをやっていきたいなと思っているのですが、そのためにも商店会に加盟し、役員になっているんです。そうやって街の人と顔見知りになることによって、『こんなことをやりたいんです』と交渉したときに、一見難易度が高そうなイベントでも、実現の可能性が高まるんですよ」

そもそも、谷川さんが関わっていた時期の早稲田

演劇は、「授業に出ていたら『お前ら、何しに大学に来てるんだ？ 演劇をやりに来たんだろう？』って言われるんです（苦笑）」というような状況だったそう。そこで行われる演劇もまた、現在よりも法令遵守の意識が薄く、アナーキーな現場だったそうです。それは決して褒められたものではありませんが、ピッコロようちえんの中島さんのお話（P27）と



街は学生を 応援したがつている

喫茶店を起点に考えていくと、そこには無数の関係性が張り巡らされていることに気づきます。常連客、スタッフ、商店街や町内会。街は、単なる商業活動だけではなく、無数の人と人とのやり取りによって育まれているのです。

しかし、街のなかでイベントを企画していると、怒られたり迷惑をかけたりすることもあるのでは……？「もちろん、怒られてばかりですよ」と谷川さんは苦笑します。

「たとえば、下北沢の店舗では、店の前が私道であることをいいことに屋外で音楽フェスをやったんです。

同様に、規則に縛られるだけではなく、規則といかに付き合いながらおもしろいことができるのか、という考え方が身につく環境だったのかもしれない。その延長で、やりたいことと迷惑をかけることの折り合いを考えている谷川さんにとって、「関係性をつくる」というのは、自分がやりたいことを実現するためにも不可欠なプロセスなのです。

「たとえば、地域と関わりたいと考えている学生であれば、お祭りでいっしょにお神輿を担いでみるといった関係性の作り方があります。商店街では年齢層がどんどん上がっていて、若い力が不足している状況。商店街としては、若い人の力を借りられるのは願ってもしない状況です。

とはいえ、単に商店街に使われるだけでは、学生の側も消費してしまうだけでしょう。それでは、僕はお

もしろいとは思えない。学生がやりたいと思うことを、やりたいと思うかたちで関わってほしいと考えています。そうして持ち込まれるアイデアは、僕らの世代が考えるアイデアと大きく異なる。そんな違いを、商店街の側も取り入れていきたいと思っているんです」

街は学生を必要としているし、学生も街と関わることによって、これまでには気づかなかった視点に気付かされる。そんな幸福な関係こそが理想であると谷川さんは話します。そして、何よりも大切なのが「じつは、学生を応援している人は、学生が思っているよりも多い」という視点です。

「そもそも、学生を応援したくない人は、わざわざ早稲田の街で営業をしませんからね。多くの店主は、学生のことを応援したいと思っているんです。

けれども、いま、その繋がりがあまりうまくいっていませんよね。それはとても残念な状況です。たとえば、学生から演劇公演への協賛をお願いされたら、少額だけでも今のところ全て引き受けているんです。でも、一部を除いてなかなか来てくれることがない。少し、さみしいなと思います」

もしも、早稲田の街と演劇とがより強く結びつくことができれば、これまでにない形の取り組みや表現が生まれてくるでしょう。そのためには、どのようなサポートをすることができるのか？ どらま館やこはぜ珈琲のような場は、そのための結節点として機能する可能性を秘めているのかもしれない。

ヒアリングを通じて

谷川さんの「誰かと誰かをつなぐことでおもしろい状況が生まれるのを、いちばん近くで見たい」という言葉がとても印象的でしたね。遠くもなく近くもない絶妙な距離感を保ちながら、そっと背中を押してくれる。そうやって、「いいんだよ」って励ましてくれるような人間が、人と人が会うために必要なのではないかと思います。わたしがコワーキングスペースを運営している目的も、人と人が会う場をつくりたいから。会うだけで、人は変わると思っています。

そうやって、出会いのための触媒となるキーパーソンは、どこかいい意味で「おめでたい人」であることも大切かなと思いました。何かをはじめるときには、取らなければいけない責任の重さを感じますよね。でも、谷川さんの言葉からは「責任を取ればいいんでしょ」っていう、「おめでたさ」を感じたんです。とても清々しいなと思いました。

人が集まる「場」という意味でもこはぜ珈琲から学べることは多かった。そこはなにか

目的がなくてもいられるし、いたくなる。そうやって人が集まっている状態からはじまり、ちょっとしたことがきっかけになって、物事が進展していくんです。それと、人が集まる場であるためには、ガラガラの空間であることも大切なのでしょう。中心に誰かがいて、その人の指示で動くのではなく、ガラガラで、入り込める余地がある。そんな空間から「おもしろい状況」が生まれるのではないかと思います。



担当：森下



「待つ保育」が育てる自主性

森のピッコロようちえん 中島久美子さん

2025年12月20日
Zoomにて

ある幼稚園児が、他の子どもが持っていた棒がうらやましかったらしく、この棒を奪い取ってしまいました。そんな乱暴な行動に対して、棒を取られた子どもは園長先生である中島久美子さんに言いつけます。

普通の幼稚園の先生なら「棒を取っちゃダメでしょ！」と叱るかもしれません。しかし中島さんの態度は、なんだかのらりくらり……。 「棒を取られちゃった！」と泣きつかれても、「そうかぁ、取られちゃったね」と言うばかりだし、棒を取った子どもが「僕も使いたかったんだよ！」と主張すれば、「そうかぁ、使いたかったんだね」としか言いません。そんな様子を見るに見かねて、他の園児たちが集まってきました。すると、集まってきた子どもたちから「一緒に使ったら？」とか「別の遊びはどう？」といった提案が出てくる。そのうちに、どうやら『棒を折って2本にすれば平等ではないか』というアイデアが子どもたちの間で採用されたらしい。けれども、いざ棒を折ってみると、そこにできたのは、長い棒と短い棒でした。「まずい……」

一瞬、中島さんの顔に焦りの色が浮かびます。長さが違ったら平等にならず、また揉めてしまうかもしれない。しかし、ケンカをしていた子どもたちは、どうやらニコニコと満足気。なぜか、棒の長さの違いは気にならないようです。気づくとケンカは収まり、子どもたちは思い思いの遊びを再開しました。

山梨県北杜市にある「森のピッコロようちえん」では、2007年の開園以来、毎日のようにこんな光景が繰り返されています。園児の数は25名（2024年10月末時点）。森のなかにある幼稚園の園児たちは、一日のほとんどを屋外で過ごしています。

「通常の幼稚園や保育園では、大人が子どもを管理し、大人の指示に子どもが従っています。この指示に従える子を『いい子』とするのが一般的な考え方ですよ。もちろん社会のなかには、誰かの指示に従うことが重要な局面も多く、わたしも、ピッコロようちえんの前は、そのような価値観で保育をしてきました。ただ、それと同時に、自分で考えて失敗し、またトライして失敗するといった力も大事ですよ。そこで、理想の

幼児教育を実現するために、自分の手でピッコロようちえんを設立しました」

開園以来、中島さんは、理想の保育を実現するための試行錯誤を繰り返してきました。そして、だんだんと生み出していったのが、「待つ保育」と名付けた自らの保育スタイルです。

指示や誘導をせず、子どもたちが自ら行動を起こすまで待ち続ける。「待つ保育」と一般的な保育との違いを中島さんは次のように説明します。

「子どもたちのケンカが発生したとき、他の幼稚園に勤務している頃は、先生として『あなたが悪いでしょ、謝ろう』と、子どもたちを裁いていました。そして、子どもたちは「ごめんね」「いいよ」というやり取りをして解決としていたんです。でも実際は、全然『ごめんね』の顔をしていないし、『いいよ』の顔もしていない。はたして、これで本当にいいのだろうか……と迷っていたのですが、日々の膨大な業務をこなすためには、そうやって『解決』していかなければならなかったんです」

しかし、ピッコロようちえんでは、中島さんはほとんど何もせずに、子どもたちが納得するまでアイデアを出し、それを実行し、解決したりしなかったりする。「ピッコロようちえんでは先生が問題を解決しないから、子どもたちが自分で解決策を考えないといけない。

たとえば、子どもたちは毎日水筒を持ってくるのですが、中には忘れてしまう子どももいます。そこで、『先生水筒忘れた！』って言われても、わたしは『困っちゃったねえ』というだけ。一緒に困るだけで頼りにならないんです。だから、子どもも、自分でどうにかしなきゃという気持ちになり、他の子どもに水筒を借りに行くようになります」

もちろん、子どもたちに任せきりにしているだけが中島さんの仕事ではありません。子どもの生活の中には、多くのリスクが潜んでいます。上記の水筒の例であれば、夏場に水分補給を怠れば、命をおびやかすでしょう。しかし、園児の中には「水筒を忘れてしまった」と言い出せない子どもも……。

「そういう場合は『今日、水筒あるの？』って声をかけます。とくに幼稚園に入りたての小さい子は、自分

の状況を言えないことも多い。どこまで任せるか、いっしょに取り組むかは、子どもの様子を見ながら対応を変えていますね。できる子であれば『どうしようね』といっしょに困るだけでいいけど、できない子であれば「○○ちゃんに借りようか?」と提案することもある。

その他にも、怪我のリスクもつきものです。ピッコロようちえんでは、守らなければならないルールとして、『棒を持つ場合は下向き』『大人の見えないところにはいかない』『森で美味しそうな木の実があっても食べない』と決めています。これらは、命に関わることなので、絶対に守ってもらっていますね」

しかし、森で遊ぶ子どもたちは、怪我をすることも少なくありません。そんな子どもたちの様子を、中島さんは意外にも「本当に怖い」と話します。「ただ、子どもたちがやりたいというのだから、やらせてあげる。そのためには、見守る大人こそ、強い覚悟が求められるんです」

中島さんは「怪我なんてしてもいい」と笑い飛ばす豪快なタイプではありません。むしろ、常に子どもたちに危険が起こらないかとハラハラしながら見守っている。しかし、そんな自分のハラハラと付き合いつつも、子どもたちのやりたいことを大切にしているのです。

大人に付度しなくていい 安全な場

子どもたちが自主性を発揮し、自らの力で考えることをピッコロようちえんでは大切にしています。しかし、そうやって「待つ」ためには大人の側にも胆力が必要になる。子どもたちを待ちながら、保護者を含めたぴっころ幼稚園の大人たちは保護者らは「かも筋」を鍛えていると中島さんは話します。「子どもたちの行動には必ず理由があります。表面上はなにかを頑固に拒んでいるように見えても、その裏

側には別の理由があるのかもしれない。待っていると、『もしかしたらこうかもしれない』『ひょっとするとこっちかもしれない』と、いくつもの『かも』を考えていくようになる。それを、わたしは『かも筋を育てる』と表現しています」

大人たちが待ちながら想像をめぐらし、かも筋を発達させていく。だからこそ、子どもたちは自主性を発揮し、自らの力で考えることができるようになっていきます。そしてもうひとつ、自主性を発揮するために、大人たちのすべきことが、「安全な場」を用意することであると中島さん。



「園児の誕生会をするときに、みんながひとりずつ誕生日の子ども好きのところを話すんです。けれども、たまに『好きのところはない!』って言い放つ子どももいる……。大人としては、『ないって言わずに、考えてみよう』と口を挟みたくくなりますよね。けれども、その子が言う『好きのところはない!』っていうのは、子ども同士で関係性がまだつくれていなかったり、その時思い浮かばないだけだったり、いろいろと理由があります。もしも、わたしが『好きのところがないって言っちゃダメ』と禁止したら、かれらはたちまち、わたしに付度するようになってしまうでしょう。

子どもたちに『自分が思っていることを話しても否定されない』という安全性を伝えなければ、子どもは本当のことを言わなくなります。言葉の背後には何か事情や考え方があるのだから、かも筋を鍛えながらその背景が見えてくるのを信じて待つしかないんです」

しかしあるとき、同じように「好きのところはな

い！」とある子どもが発言すると、少し年長の園児が、こんな提案をしてくれたといいます。

「『好きなところはない』っていう言葉に対して、年長さんの年上の子どもが『好きなところはないって、言わないほうがいいんじゃないかな？』と話し始めました。そうすると、子どもたちが、『好きなところはない』って言うことが、いいのか悪いのか考えはじめる。わたしが『好きなところはない』って言っちゃダメ」といって、それを守るのは規則を守るだけですが、子どもたちが『好きなところはない』って言わないほうがいいんじゃない？」と話しはじめるのは、自分たちの規則をつくっていくこと。同じ『言わないほうがいい』でも意味が違いますよね」

ピッコロようちえんの園児たちは、外から規則を与えられるのではなく、自ら規則を生み出すことに慣れていています。そこで行われているのは、子どもたちによる「自治」と言えるものでしょう。そのため、ピッコロようちえんを卒園した子どもたちは、小学校に行っても、少しだけ規則との付き合い方が変わると、中島さんは話します。

「ピッコロようちえんの卒業生たちは、規則を自分のものにする子が多いかもしれません。小学校に入って『廊下を走ってはいけないというルール』があれば、なんでそれがいいのかを考える。人がいたら危ないから走ってはいけないのか、滑って転ぶと危ないからダメなのか。そうやって、規則そのものを考えることは、規則に縛られないことへとつながっていきます」

自分の気持ちと

他人の気持ち

しかし、子どもだけでなく多くの人にとってまた、規則を捉え直したり、自分のやりたいことを見詰め直すような自主性を発揮するのは困難なこと。いまや、社会ではやりたいことを聞かれても、「特にないですね……」と言葉を濁すのが一般的になっています。

中島さんは、そんな自主性のなさの理由を「子どもの頃から、やりたくないことばかりをやってきたからではないか」と考えています。

「わたしも、若い頃は『やりたいことがわからない』と思っていました。やりたくないことやっていると、本当にやりたいことがわからなくなってしまうんですよね。

自分の心がぶるぶると震えてしまうような本当にやりたいことって、誰もが持っているはずなんです。園児の中には、ダンスを踊ることが好きな子、転んで怪我をした友達のそばについてあげるのが好きな子、お客様が来るといつもアテンドする女の子など、いろいろな『好き』を持つ子どもたちがいる。そんな魂が震えるくらい好きなことをそのまま大事にすることで、自主性が育まれるし、自分の意見も見えてくるのではないのでしょうか。

これまでの社会で『いい人』だと考えられてきたのは、相手のことを優先して、自分の気持ちを抑えられる人。けれども、自分の気持ちがわからないと、他人の気持ちはわからない。ある園児に『先生、自分の気持ちと相手の気持ちは同じ大きさだよ』って言われて、ハッとしたことはいまでも覚えています」

自分の気持ちを大切にしながら、外から決めた価値観に染めるのではなく、みずからルールをつくるようになっていく。ピッコロようちえんが取り組む自主性の育み方は、幼児だけでなく、大学生や社会人を含むあらゆる場面での教育に有効なものでしょう。

中島久美子

幼児教育家。東京・横浜・山梨県内の幼稚園・保育園に勤務後、「時間に追われることなく、子どもと向き合う保育をしたい」と、「森のようちえんピッコロ」をお母さんたちと立ち上げる。「想像以上に子どもはすごい！」と驚きの毎日。小学館雑誌『3,4,5歳児の保育』2010年2月号の第45回「わたしの保育」において保育での出来事を綴った「動物の死」が大賞受賞。地球元気村特別講師。

ヒアリングを通じて

中島さんにお話しただいたいくつかのキーワードのなかで、特に印象的だったのが「待つ保育」という考え方でした。すぐに解決策を示すのではなく、「一緒に困る」ことによって、子どもたちの自主性が育まれ、そこに小さな自治が生まれていました。このことは、今後どらま館に生まれる新しいコミュニティにとっても大事な要素になっていくのではないかと思います。そして、「待つ」を実行するには、時間もかかり、教育者としての「覚悟」も必要とお話されていましたね。いっしょに困っているばかりではなく、度を越えたときには介入する姿勢も語られていました。時間をかけて待つ覚悟と、度を越えないかの目配りを、ピッコロの保育者は意識されていました。悩み叩かれ試行錯誤を繰り返し、ようやく自分が考える理想の保育にたどり着いたと朗らかに語る中島さんはとても素敵でした。

ピッコロを支える大人たちのそんな姿勢を通じて、子どもたちが自らの考えを伝える。それぞれが意見を話しつつも、お互いの意見を否定もせず「どうしようか……」と言い合う。

そうやって、自分の意見を言えることは、問題を解決することよりも、実はずっと大切なことのように思います。「それを言っても否定されない」という心理的安全性を大人たちが支えているんですね。

また、ピッコロようちえんでは、園児はまず「自分」を大切に、「自分を大切にしたのと同じ大きさで他の人も大切にする」姿勢を持っています。中島さんは「カモ筋」という言葉を使っていましたが、そうやって、自分と同じ大きさで相手を大切にするからこそ、「ほんとうはこう言いたいのカモ」、「何か他の理由があるのカモ」といった「カモ」の想像力が生まれてくると感じました。我々大人にこそ必要な姿勢を
中島さんの話から
考えさせられました。



担当：荻原



場づくりは、ただの「客」よりおもしろい
京都市立芸術大学学長 小山田徹さん

2026年1月19日
Zoomにて

劇場は、不特定多数の人々が集まる「場」としての機能を有しています。しかし、パフォーマンス集団の一員としてキャリアをスタートしながらも、30年以上にわたって、劇場の「外」で人の集まる場を模索し続けてきたのが、今回ヒアリングを行った小山田徹さん。アーティストであると同時に、京都市立芸術大学の学長を務めている人物です。

「共有空間」をキーワードとしながら、さまざまな場づくりを行っている小山田さん。彼が場づくりを意識するようになったのは1992年のことでした。当時、小山田さんは京都を拠点とするパフォーマンス集団「ダムタイプ」に所属。しかし、その中心メンバーであった古橋梯二さんが突然、HIVに感染していることをカミングアウトしました。当初は悲しみに沈んだメンバーたちでしたが、気持ちを持ち直し、HIVやAIDS、ジェンダー、セクシュアリティといった問題についてのリサーチや議論を行うようになっていきます。かれらのオフィスには、アーティストだけでなく、アクティビスト、研究者など数多くの人々が集まりました。「いろいろな人々と話し合いをするなかで、どのような集まり方であれば、いろいろな意見を集約したり、柔らかい意見も出しやすくなるのかを考えるようになっていきました。テーブルの高さ、司会者の位置、ごはんを食べながら話すのがいいのか、テーブルの上にかかがあったほうが話しやすいのか……？ 試行錯誤しながら場をつくっていったんです」

そして、小山田さんらは1992年に「アートスケープ」と名付けたインディペンデントのアートセンターを立ち上げます。ここでは、AIDS、フェミニズム、セックスワークなど、さまざまな団体が集まる社会運動のための場。しかし、ここでぶつかったのが「開かれた空間」をつくることの難しさでした。

「ジェンダーをはじめとする問題について、活発な議論が行われる一方で、専門性の高い空間は『無言の抑圧』を生み出してしまいます。当初、僕らは誰でも来れるアートセンターを目指していたのに、だんだんと『当然、ジェンダーについて考えたことあるよね？』という空気が漂いはじめる。すると、専門性や経験値が高く、覚悟を持った人間しか入れない場所になって

しまったんです」

開かれた場所を目指していたのに、特定の人しか入れない場所に……。この反省を活かして、小山田さんらが1993年に開設したのが「ウィークエンドカフェ」でした。2週間に1回開催されるオールナイトのカフェは、専門性や経験値を問わず、誰もが集まれる場所。そこには何の目的もありません。最盛期には、一晩で300人あまりの人々が集う京都のエポックな場所に成長します。

「まだ携帯電話を持っている人も少ない時代。そこに行けば誰かに会えるという感覚だったんです。そこには、浅田彰さんや坂本龍一さんも顔を出していたし、京都大学のすぐ近くにあったから、物理学をやっている人間とアーティストが、お互いの名前も知らないままに話し込んでいるような空間だった。営業許可も取らず、ホームパーティの延長として開催していたので、ドリンクもほとんど原価での販売でした」

誰もが目的なく集まることができ、そのなかで会話が交わされる。そんな理想をつくるために、小山田さんはいくつもの工夫を施していたと振り返ります。

「お客さんに、カフェを仕切るマスターの役割をお願いするんです。マスター席にいと、そこにいる全員と話すようになるし、場所に対しての当事者意識を持つようになる。準備、片付けなどのほかに、喫煙の問題や自転車の駐輪なども責任を感じてサポートしてくれるようになります。そうやって、いろいろな人と場をつくっていくうちに『共有空間の獲得』が自分のテーマになっていきました」

寸止めのデザインを施す

ウィークエンドカフェは、建物の問題などから1996年に終了。しかし、この活動は「バザールカフェ」に発展し、現在まで27年にわたって続いています。

ウィークエンドカフェが、ホームパーティの延長として営業許可を取らずに活動していた一方、バザールカフェでは営業許可を取り、社会とのバランスが取れた形での共有空間を模索。そのなかで、キーワードとして浮かび上がっていったのが「埋め込まれた労働」

というアイデアでした。

「たとえば、目の前で誰かがワインをテーブルの上でこぼしたら、普通に手伝いますよね。そして、片付けながら言葉を交わしている。そんな行動も、大きく捉えたら労働の一部ですよ。そうやって、労働を誘発する場はどのようにつくれるのか？ そう考えると『少し足りない』という感覚こそが大切なのではないかと考えるようになっていきました。

それを、僕は『寸止めのデザイン』と呼んでいます。フルコンタクトではなく、ちょっと足りない、ちょっと届かないデザインを施すことで、居心地のいい空気感を持つ共有空間をつくれるのではないか。バシバシにデザインされたカフェやアーティストが作り出したかっこいい空間は、緊張するし、小声でしか話せない感じがしますよね」

どこか足りない空間が促す行動。小山田さんが手がけている焚き火のプロジェクトも同様の理念に貫かれています。小さな焚き火は、誰かが世話をしないとすぐに消えてしまう。足りない行動を、人々が分かち合うことによって、ひとつの空間が共有されるのです。

ただ、その意味では、演劇やダンス作品を上演する劇場空間は「フルコンタクトのデザイン」であるといえないでしょうか？

「演劇やダンスを上演している空間は、緊張感があり、閉じられている。もちろん、お客さんはそんな緊張感のある時間・空間を味わいに来るので、それ自体は問題ではありません。

でも、劇をするだけが劇場の役割ではない。そこで

は政治闘争もできるし、祭りもできるし、体制派も反体制派も演説ができる。そこは、いろいろなものがやりあえる場所です。コミュニティとしての場所として劇場を考えるなら、舞台上演以外の時間や空間を確保したり、空間を開いたり閉じたりするバランスを考える必要があると思います」

ところで、そんな「足りなさ」を生み出せるのは、バザールカフェが採算を度外視しているからできることかもしれません。そこでは小山田さんを含め、ほとんどのメンバーがタダ働き。しかし、そこで得られたつながりや、思わぬ視点などが「対価」となっています。

「そうやって場を運営しながら実感できるのが、自分たちで場をつくることは、ただのお客さんでいるよりもはるかにおもしろいということ。消費のシステムに乗せられ、ただのお客さんでいることって、いちばんおもしろくないんです。サービスとして提供されるのではないつくり方の場があることで、社会も豊かになりますよね」

「施設化」に抗って

しかし、「共有空間」という発想とは逆に、近年、さまざまな場所が「サービス」として提供され、市民はサービスを消費するという関係しか築けなくなりつつあります。その象徴的な事例が、劇場や公園といった公共性の「施設化」であると小山田さん。

「どの場所も、管理責任者がはっきりしていて、誰にクレームを言えばいいかがはっきりしている。すると、使う人は責任を取らなくていいから楽。一方、管理する側は、数多くの利用ルールを生み出し、クレームを最小限に食い止めようとします。そうやって、公園、劇場、大学など、あらゆる場所が『施設化』し、隅々まで管理下に置かれていますよね。そこは、開かれているように見えて、ルールによってがんじが



らめにされてしまう場所です」

こと大学に関して考えると、「施設化」のみならず、社会からさまざまな要求が突きつけられています。短期的に成果を上げること、費用対効果に見合った研究を行うこと……。小山田さんは、それらの要請は、果たして大学教育にふさわしいものなのだろうか？ と疑問を呈します。

「たとえば、芸術系大学なら、そこで行われることの99%は基礎研究。それを経て、学生たちはアートの考え方や一生表現を続けていくための心構えを学んでいく場所です。

京都市立芸術大学は、有名なアーティストを輩出することを目標にしていません。アートを通して世界の捉え方やその技術を磨いていくこと。それを翻訳しながら、生活の中に応用できる人々を輩出することこそが目標です。だから、子育てをしながら、その子に世界の捉え方を伝えるお母さんになる人、会社員をしながら創造活動を続けるような人こそが、京都市立芸大が目指す卒業生の姿なんです」

現在、小山田さんは京都市立芸大の学長として、「学長広場」という取り組みを行っています。学長室の半分をパブリックスペースとして解放し、学生らは、それぞれ好きな時に入ってくる。ここで学生とお弁当を食べるのが、小山田さんの日課となっています。

「学長広場で生まれるのは、カフェのような弱目的的な集まり。広場ではお弁当を食べてもいいし、歌を歌ってもいいし、本を読んでもいい。目的のない人々が集まって、コミュニケーションを生み出しているんです。テーブルの上には『にぎり石』と名付けた石が置いてあるのですが、これを触りながらみんな話していると、自然と会話がマイルドになっていくんです」

にぎり石を握りつつ、本を借りに来た学生、ご飯を食べにきた学生、授業をさぼっている学生などが集い、共通の目的もないままにコミュニケーションが生まれている。けれども、そこに集まることのできない学生もいるのではないのでしょうか？

「もちろん、そこに興味がなかったり、そういう場所が苦手な学生もいますよね。でも、ひとつの場所が、全てを担う必要はありません。小さな焚き火がいくつ

もあるような感じで、『学長広場』のほかにも小さな場がいくつもあれば、どこかに引っかかるかもしれない。僕がこのような取り組みを行うことで、ほかの教職員もそういう場を開きやすくなるんです」

30年以上にわたって、場づくりの試行錯誤を積み重ねてきた小山田さん。「施設化」「埋め込まれた労働」など、具体的な経験則から生み出されるその発想に、どらま館がこれからの場をつくっていくためにも、多くの刺激を受けることができました。

小山田徹

1961年鹿児島生まれ。京都市立芸術大学に在学中に友人達とパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。国内外で活動。1990年代頭にメンバーのHIV感染を機に、AIDSを取り巻く問題に対しての活動を始め、ダムタイプを離れた後、「共有空間の獲得」をテーマに人々が出会い交流する場の創造を活動とする。2010年から京都市立芸術大学の彫刻専攻の教員。2025年4月より同大学の理事長・学長に就任。

ヒアリングを通じて

小山田さんからは、大きく「共有空間」についての話と大学教育についての話を伺いました。これまで、小山田さんは専門性や目的意識が強い空間ではなく、敷居が低く誰もが入れる空間はどのようにつくれるのかを試行錯誤してきました。そのなかで、キーワードとして話していたのが「弱目的」。目的もなく集まれるカフェのような空間を、小山田さんは実践してきました。さらに、空間のマスターを担ってもらったり、「寸止めのデザイン」で、空間に対する「獲得感」を感じてもらう。それによって、集団が活性化していくのではないかと。そのようにしてつくられた「小さな焚き火」がいくつもあることによって、取りこぼさないことにつながっていくのではないかとお話していました。

一方、大学の話については近年進むルールに縛られた「施設」という言葉に対して、「森」という比喻でお話をされていたのも印象的です。大学では、森のように多様なものが絡み合いながら循環している。隠れ場所があった

り、ネットワークが発生してしまったり、化学反応が起きたりするような場所。また、失敗が肯定されるし、何者でもないことが許容される。芸術大学で行っていることの99%は基礎研究というお話をしていましたが、芸術系であるか否かにかかわらず、大学という場所は、即時的な成果ではなく長く続けられる活動のベースをつくることに価値がある空間なのではないかと思います。



担当：呉宮



強目的と弱目的が地続きなまち
NPO 法人抱樸 奥田知志さん

2026年3月13日
Zoomにて

「よく、ホームレス支援団体と紹介されるのですが……」と、奥田知志さんはリサーチ部によるヒアリングのなかでつぶやきました。奥田さんが代表を務めるNPO法人抱樸（ほうぼく）は、福岡県北九州市を拠点とする認定NPO法人。ホームレス支援を出発点に、居住・就労・子ども支援など、その事業数は29に及びます。そして、現在は2026年夏に竣工予定の「希望のまち」という複合型社会福祉施設を中心とした「まち」をつくるプロジェクトを展開している組織です。

そんな抱樸は、今や日本で最も有名なNPO法人のひとつとなっています。そのボランティアに登録している人々は2700人あまりを数えている。いったいなぜ、そんなにも抱樸に人が集まるのでしょうか？そして、抱樸ではどのような場づくりが行われているのか？芸術と福祉という異なるジャンルでありつつも、その実態に迫ることは、林雄一郎基金やどらま館の将来像を描いていくにあたっても参考になるはずで

す。「逆に聞きたいくらいなんですけどね、『何でうちに来るの？』って」

質問をぶつけられると、滋賀出身の奥田さんは、いまだ抜けない関西弁のイントネーションでそう苦笑します。大学生などもよく見学や研修に訪れるものの、その多くは「福祉関係の仕事に就きたい」といった実利的な目的からの見学ではないらしい。

「実際、活動を見に来た人は、『ホームレス支援』のようにひとつのカテゴリーに収まらないことに驚いていますね。抱樸に集う人の多くは、『支援をしたい』というような『強い目的』のために集まっているのではないかもしれません。

一般的に福祉制度は『強い目的』によって成り立っています。対象者を限定し、基準に沿って認定し、それをクリアした人に対して支援が行われる。このような事業に携わるのが福祉施設の役割です。一方、『希望のまち』のようなまちづくりは、対象者を限定しない『弱い目的』の場所です。抱樸の活動自体も、さまざまな活動が展開されていて、ひとつの目的に限定しきれないから、多くの人が集まっているのかもしれないね」

特定の強い目的のためではなく、目的なく立ち寄ることのできる弱い目的の集まり方。その重要性は、京都市立芸術大学の小山田徹さんとのヒアリング(P32)でも語られていました。「バザールカフェ」や「学長広場」が小山田さんのやり方である一方、奥田さんは「弱目的」的に集えるまちをつくっているのです。

「復帰」したい社会なのか？

1988年の設立以降、抱樸では、ホームレス支援を中心とする目的のはっきりとした支援を行ってきました。これに加えて、弱目的的なプロジェクトに乗り出した背景には、こんな発見があったといいます。

「自立支援の世界では、『社会復帰』という言葉をよく使います。けれども、この社会は復帰したい社会でしょうか？困窮してる本人にも課題はありますが、一方で、復帰させる側の社会にも問題があるのではないかと。そこで、まちづくりや地域づくりをやっていく必要を感じたんです。

それを痛感したのが2008年に起こったリーマンショックの後。このあたりから、どんどんと社会の底が抜け、それまで日本が持ってた社会構造自体が崩れてるように感じました」

底が抜けた社会を立て直すために構想されたまちづくり。そして、これに乗り出すもう一つの要因が、単身世帯の増加でした。いま、単身世帯の割合は日本全体で40%、東京都に限れば、すでに50%を超えています。

「日本では、これまで、家族による支えをもとにして社会制度を設計していました。しかし、肝心の家族がいなくなってしまう。もちろん、家族という制度には家父長制をはじめとするさまざまな弊害があります。しかし、それと同時に、なにかを生産したり、追求するような場所ではなく、弱目的的に集まれる共同体としての機能があるはずで

す」抱樸では、「家族機能の社会化」というキーワードを掲げています。単身世帯が増加しているいま、「家族」という共同体に福祉を押し付けるには限界がある。そこで、「家族」の役割を社会が分業する。抱樸では葬

儀や死後事務までを引き受け、家族に代わる弱目的的に集まれる共同体をつくっているのです。

また、抱樸の弱目的に対する眼差しは、困窮者に対する炊き出しの現場においても現れていると奥田さん。食料を配布するという強目的な取り組みである炊き出しに、抱樸では弱目的のデザインを組み込んでいるのです。

「炊き出しに来た人には、よく『想像していた炊き出しの雰囲気と全然違う』と驚かれます。普通、炊き出しというと下向いてる困窮者がずらっと並んで物資を配っている光景を想像するのですが、僕らの炊き出しは雰囲気も明るいし、物資を配ったあとには『星空カフェ』として、お茶をしながら語らいの場をつくっている。そこは、人を助ける場所ではなく、誰でもそこにいていい場所なんですよ」

このように弱い目的による集まりの重要性を説明する奥田さんですが、その一方で、弱目的の場「だけ」でいいと考えているわけではありません。抱樸では、ゆったりとした弱目的な場を用意している一方、制度に熟知したプロフェッショナルなスタッフが困窮者に対する支援を行う。奥田さんは「このふたつは地続きであり、どちらも必要なんです」と、その言葉に力を込めます。地続きであることの象徴的な例として、奥田さんは、彼自身が牧師として奉仕をする東八幡教会の内装について語りました。

「日常の時間から少し距離をおき、神様の前で一人になる礼拝の時間は非日常的な時間といえます。その一方で、教会には、礼拝の後に食事をしたり子どもたちが遊ぶような時間もある。うちの教会では、コロナ以降、礼拝堂と食堂の仕切りを取り払ったんです。そこにはふたつの空間がありますが、その両方がつながっている。

弱目的な時間と同じくらい、強目的な時間も必要です。日常的な時間から離れて、大きな時間の流れに自分の身を置いてみる。週に1時間でもいいからそんな時間を確保することが、特に現代人には求められているのではないか。この強目的な時間は、ある人にとっては礼拝になるし、ある人にとっては自然に触れることとなります。わたしは門外漢ですが、お芝居を見に

行くこともそれにあたるかもしれませんね」

2026年夏に竣工する希望のまちもまた、この弱目的と強目的が地続きに折り重なって生まれる場所といえるでしょう。1階部分には、ミシュラン・ビブグルマンに選出されたシェフによるレストランが入り、抱樸とゆかりのある作家が選書した図書館、コワーキングスペースそして大浴場が設けられる。朝から夜まで、そこは誰もが弱目的に過ごせる場所になっています。一方、2階、3階にはひとりでは暮らすことが難しい人たちのための強目的な救護施設として50部屋を用意しています。

強目的と弱目的が折り重なって生まれる場。抱樸では、そんなまちをつくらうとしているのです。

言葉と受肉

ところで、抱樸ではこれまで人を引きつける言葉をいくつも編み出してきました。炊き出しの現場には「あんたもわしもおんなじいのち」という言葉が大書され、奥田さんは「ホームレスとハウスレスは違う」という言葉をしきりに語ります。今や福祉を越えてさまざまな領域で使われるようになった「伴走型支援」という言葉も元々は抱樸が生み出したものだし、希望のまちのコンセプトである「わたしがいるあなたがいるなんとなかなる」は、一度聞いたら忘れられない言葉として多額の寄付を集める原動力になってきました。

「『あんたもわしもおんなじいのち』という言葉は、炊き出しの現場で、ホームレスのおっちゃんから言われた言葉でした。炊き出しに訪れるホームレスの数がどんどん増えていったとき、それまで一人一人にも丁寧に向き合ってきたのを、『並んでください！』ってメガホンで叫びながら並んでもらうように変えたんです。すると、列の中から『お前いつからそんな偉なっただんか！』という声が飛んできた。そして、『あんたもわしも同じ命やないか！』って。

このとき、僕は効率にとらわれて、炊き出しの利用者をあたかもモノのように扱っていたことを見透かされたんです。それは、とても痛い言葉だった。絶対に忘れてはいけないと思って、炊き出しの現場にはこの

言葉をいつも掲げています。

言葉には歴史がありますよね。頭で考えてつくられた言葉と、経験や体験の中で生み出されてきた言葉では、その肉厚さが大きく異なります。経験や体験の中から生み出されてきた言葉には、最初から肉がついている。そういう受肉化した言葉かどうかは、その言葉に重みがあるかどうかを分けるものですね」

頭で考えた言葉ではなく、経験や体験を経ることによって生み出された言葉。肉を伴って生み出された言葉が、抱樸の周囲に人々を集める旗印となってきたのでしょうか。しかし、そうやってつくられた肉のある言葉も、時間が経ったり、多くの人々が集うことによって形骸化してしまうのではないか……。そんな疑問に対して、奥田さんが答えるのが言葉に対する態度でした。

「その言葉が生み出された歴史だけでなく、どのような姿勢で言葉を使っていくかもまた、受肉には関わっています。どのような態度でその言葉に向き合っているのか？ どれくらい本気でその言葉を実行しようとしているのか？ 言葉に対する姿勢が問われるんです」

じつはスケジュールの都合で、奥田さんのお話を聞いたのは、どらま館リサーチ部でミッションが決まった後のこと。ミッションが決まり、ほっと一息ついていたところに、奥田さんから言葉に対する姿勢が問われ、リサーチ部の面々は身が引き締まる思いになりました。

そんな言葉に対する態度とともに、奥田さんから語られた「そもそもミッションとはなにか？」という言葉もまた、リサーチ部の心に深く刻まれるものとなりました。

「自分の子どもたちにも、仕事を考えるにあたって『ドリームとミッションは違う』と話しています。ドリームは、自己実現であり、やりたいことができる幸せを意味します。一方で、ミッションが向かうのは『やらなければならない』こと。『できたらいいな』ではなく、



『やらないかん』と立ち上がるのがミッションなんです。抱樸は、ミッション集団でありたいと思っていますね」

弱目的と強目的、言葉の受肉化、そしてドリームとミッションのちがひ。わずか1時間あまりのヒアリングだったものの、奥田さんからは、林雄一郎基金のこれからつながる数々の「受肉化した言葉」が語られました。

奥田知志

NPO 法人抱樸理事長、東八幡キリスト教会牧師
1963 年生まれ。関西学院大学神学部修士課程、西南学院大学神学部専攻科をそれぞれ卒業。
九州大学大学院博士課程後期単位取得。1990 年、東八幡キリスト教会牧師として赴任。同時に、学生時代から始めていた「ホームレス支援」に、赴任地の北九州でも参加。事務局長等を経て、北九州ホームレス支援機構（現 抱樸）の理事長に就任。これまでに 3700 人以上のホームレスの人々の自立を支援。

ヒアリングを通じて

奥田さんへのヒアリングは、スケジュールの都合からリサーチ部でミッションを策定した後でヒアリングとなりました。そのため、どのような言葉を使うのか？ という問いと同時に、どのようにして言葉を使うのか？ という問いを投げかけました。

奥田さんは、これまで魅力的な言葉の数々を生み出してきました。「受肉」という概念を補助線にして語られましたが、まさに彼の言葉は「肉の重さ」を伴っているものだと思います。もしかしたら「はじめにことばありき」と書かれた聖書を深く読み解くプロテスタントの信仰を持つ奥田さんの背景もまた、彼が「肉」として言葉を扱うことに関係しているかもしれません。

もう一点特筆すべきは、強目的と弱目的との関係でしょう。「地続き」という言葉で勝たれていますが、強目的、弱目的のどちらも、生活のなかで不可欠な時間です。ともすると、弱目的であることを是とし、強目的であることを否としてしまいそうになりますが、どち

らかを選ぶのではなく、どちらも選べる状態であることこそがわたしたちの暮らしには大切ではないか。個人的にも以前から注目してきた「希望のまち」のコンセプトは、そのような概念のもとに支えられていることに気づきました。



担当：萩原



共有可能な未来をつくる ロジックモデル研修レポート

劇場のみならず全国各地のさまざまな組織、会社、プロジェクトなどにおいて、その活動の指針となるミッションが策定されています。このミッションをつくるにあたり、事業によって生み出されるアウトカムを論理的な図として表現するのが「ロジックモデル」という手法です。どらま館では、2025年10月26日と2026年2月23日、どらま館参与である柴田英杞さんを講師に迎えてロジックモデル研修を開催。ここに、どらま館に制作部として勤務する現役の学生や、かつて劇場を使用し、どらま館のこれまでをつくってきたOB、OGといったメンバーらとともに、リサーチ部のメンバーも参加しました。

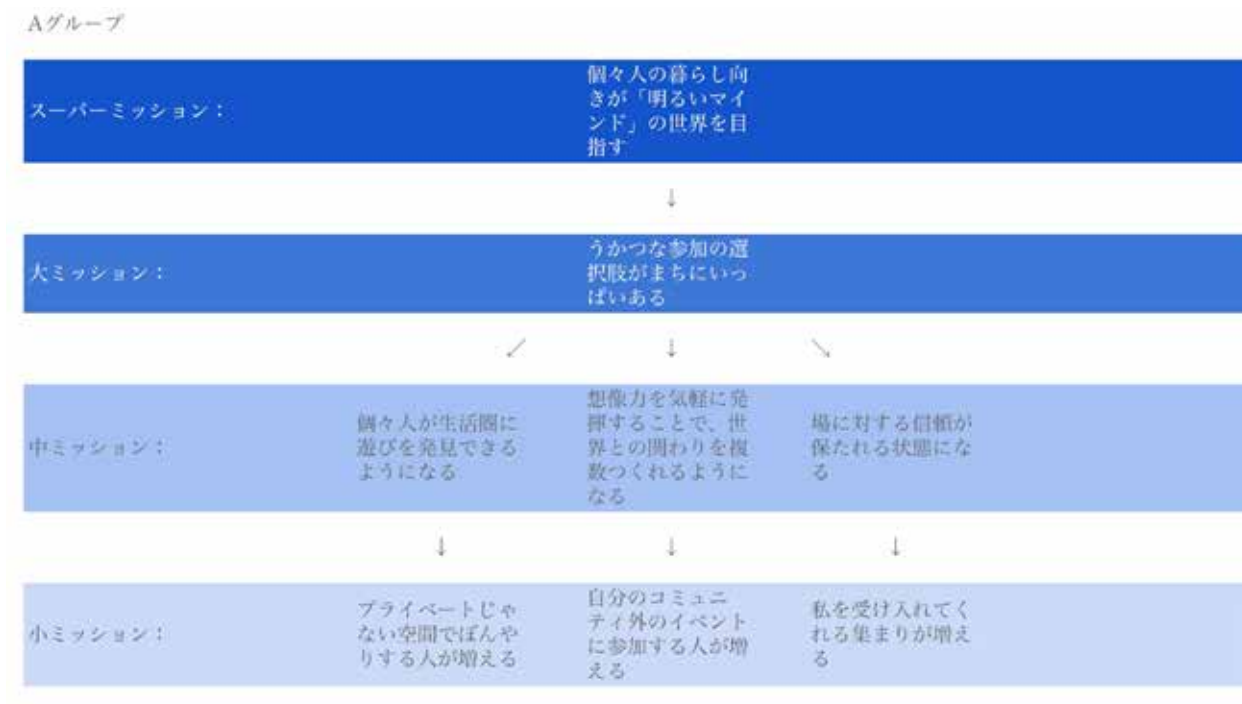
ロジックモデルを作成するためには、はるか未来の理想についてそれぞれの参加者が言語化する必要があります。研修を通じて、この過程を体験するとともに、リサーチ部としては、今後のミッション策定のためにどんな思考のフレームが必要なのかが見えてくるで

しょう。

今回のロジックモデル研修では、演劇のみならず、文化芸術・福祉・教育などを考慮しながら、社会のなかにおけるどらま館の役割を定義。さらに、早稲田大学が掲げる「人間的力量」の醸成に資することも劇場にとって大切な要素となります。

このような点を考慮しながら、どらま館がコミットすることで生まれる10年後の社会を示す「大ミッション」5年後のあり方である「中ミッション」さらに、1年後の姿を示す「小ミッション」を決めていきます。

初日の研修では、柴田さんよりロジックモデルについての説明が行われたあと、早速、2グループに分かれて議論を開始。はたして、10年後のあるべき姿とはなにか？ そのとき、どのような社会となっているのか？ そのなかで、どらま館が果たすことのできる役割とは？ 10年後の理想を達成するために、5年後にはどうあるべき……？ と、いくつかの切り口を



検討しながら、それぞれのグループで言葉が生み出されていきます。

およそ5時間あまりの議論の末に、Aグループが生み出したのが「うかつな参加の選択肢がまちにいっぱいある」という大ミッション。日常生活のなかで、いろいろなイベントが行われており、気軽に参加したり企画することができる未来の姿を、この言葉に託しています。一方、Bグループが見つけた言葉が「早稲田に集まる人々が他者との交流を通じて幸せ（HAPPY）になる」というもの。追求する姿を「交流を通じて幸せ（HAPPY）になる」と定義することで、どらま館が目指すべき10年がはっきりと見えてきます。さらに、この大ミッションから3つの中ミッションを生み出し、初日の研修は終わりました。

研修の2日目には、1日目につくったミッション、を受けて、1年後にこうありたいという「小ミッション」を定義するとともに、AグループとBグループの

大ミッションを統合した「スーパーミッション」を考えていきます。スーパーミッションが射程とするのは、およそ30年後の未来。人口動態やテクノロジー、価値観などの変化などを受けて、30年後にはいったいどのような社会が生まれているのでしょうか？

Aグループが提出したスーパーミッションは「個々人の暮らし向きが明るいマインドの世界を目指す」というもの。そこには、人々が世界を楽観的に捉えることによって、その先の未来に対しても希望を持てる世界が広がるのではないかという思いが込められています。一方で、Bグループでは「違いや変化が豊かさとしてあたりまえに循環している社会」というミッションとして掲げました。現在の価値観では「効率が悪い」と思われてしまう差異。けれども、30年後にはそんな違いが「豊かさ」になっている……。この言葉には、そんな願いが込められていました。

2日間・10時間にわたってたっぷりと未来の姿に

Bグループ



ついて考えた参加者たち。最後に研修の感想を問われると、「ミッションは文字だけでは直感的に把握しにくい、自分の手でミッションをつくると、言葉のひとつひとつに込められた意味を感じる。とても豊かな時間だった」「過去、現在、未来を行き来しながら、普段は曖昧にしているものを整理する時間となりました。また、整理されたことによって、他人と共有可能なものになっていくように感じた」などと、その感想を共有しました。

講師の柴田さんは、完成したふたつのロジックモデルに称賛を送り、2日間の研修をこう振り返ります。「わたし自身、今回は早稲田大学が掲げる『人間的力量』という言葉をおきながら研修を進めていきました。スーパーミッションが目指す30年後には、社会の状態も大きく変わっているでしょう。みなさんの議論はそんな未来の姿を深掘りする素晴らしいものでした。とくに、それぞれのチームのスーパーミッションには、人々の心理的安全性や相互理解の状態である

『人的資本』、についての言葉や、人々のつながりによって行動を活発にし、全体の効率性を高める『社会関係資本』についての言葉、そして、インフラや文化制度のように魅力的な社会を持続的、安定的に維持するための社会的装置である『社会的共通資本』についての言葉が散りばめられている。それらは、『人間的力量』のみならず、いま非常に重要視されているウェルビーイングという概念にも通じると思います」

1年後、5年後、10年後、そして30年後……。はるか先の未来を想像することで、より長い時間感覚での思考や、社会の姿、そして「幸せとはなにか？」といった、劇場が追求する価値の本質に潜るような時間となりました。今回のロジックモデル研修は、あくまでもシミュレーションとして行われたものですが、リサーチ部の面々にとっては、林雄一郎基金のミッションを策定するためにも、とても強い影響を与える研修となりました。

ニッポン ン策定会議



ミッション策定までの道のり

2025年10月から、半年間にわたってヒアリングやディスカッションなどを積み重ねてきたリサーチ部の面々。これまでに得られた知見を共有しながら、いよいよ林雄一郎基金のミッションを策定するためのディスカッションが2026年の2月からはじまりました。

1日目は、これまでのヒアリング内容を振り返りながら、どんな内容が語られていたのかについて整理をしていく時間。

いちばんはじめにお話をうかがった「犀の角」では語られた不完全さを受け入れながら成長していく「植物」のような成り立ち、あるいは「仮設」であることによって、いつでもやめられるようなスタンスを取っていることが印象的でした。また「みんなで困り合う」ようなつながり方は、森のピッコロようちえんで中島

さんが大切にしているスタンスにも共通しています。劇と現実が行き来しながら展開される犀の角の空間を「即興劇」と規定することによって、困窮している人もその現実から距離を取るという視点は、福祉だけの視点では得られなかったものでしょう。

一方、秋田では「カタルバー」の取り組みが強烈な印象を残しました。街で「よそ者」のようなポジションの人が積極的に自らの関心事を語るこのイベント。これを中心に、秋田では、利用者の能動性が非常に高まっていました。その背景にあったのが、秋田文化創造館内の人員配置。立ち上げの段階から、他の施設ではあまり重視されない相談業務を重視しており、パートを含め16人が館内業務にあたっています。そんな組織デザインが、相談をしやすい雰囲気を生み出し、結果として利用者の能動性を掻き立てているのかもし

れません。

こはぜ珈琲の振り返りは、おもに店主の谷川さんという人物を巡って展開しました。なにかおもしろいことが起こるのが楽しみという、弱目的なスタンスで学生や街の人々と関わる谷川さん。ただの店主でもなく、ただの卒業生でもなく、ただのまちの人でもない、しかしそのどれでもあるという谷川さんのアイデンティティが、独特の相談しやすさを生み出しています。また、谷川さんであれば絶対におもしろがってくれるという安心感もまた、そこにいろいろな人が集う要因となっているでしょう。

ピッコロようちえんは、子どもを裁いたり評価せずに「待つ」という姿勢を大切にしていました。それは、自分と相手の自由を尊重することであり、だからこそ、自分の感情も大切にできる。それは、もしかしたら基金の創設者である林さんが早稲田大学で演劇を行いながら感じていた「自由」や「自治」に似たものであったのかもしれない。

共有空間に着目する小山田さんは、焚き火や銭湯などが生み出すプリミティブな行為を用いています。頭ではなくまず体が動き、判断をする前に反応をする。そんな身体性が生み出す共有空間を重視している故山田さん。彼は、そのような設えを「寸止めのデザイン」と表現していたのかもしれない。

さらに、これらのリサーチの内容に通底するものとして、「贈与」という関係であったり、「オーナーシップ」という概念、あるいは、その言葉の中に「敵」というニュアンスも含む「ホスピタリティ」など、改めて、リサーチの中から浮かび上がってきた言葉たちをテーブルの上に並べ、ミッションを作成していくため

の土台をつくりました。

火、森、場……それぞれのミッション候補

この整理を受けて行われた2日目のミッション策定会議。ここではまず、それぞれのメンバーが候補となるミッションを出し合いました。

「離合集散を繰り返し続けて、ずっとその周辺に居ることができる場所」という言葉を提出したのは吉田さん。「組織的にはバラバラでいい場所であるのと同時に、みんなが居続けることができる場所であってほしい」と、その言葉に込められた意味を語ります。同じく「場」に注目したのが荻原里砂さんによる「多様な人々が気軽に交流する場を作り、早稲田のまちから新たな文化を生み出す」という候補と、呉宮さんによる「異なる他者とともに、いまとは別のあり方を想像し、受け取りあい、試しあえる場をひらく。大学とまちに、そうした関わりを少しずつ引き受けていける小さな焚き火を増やし、自由と自治を育む」という候補でした。

呉宮さんが提出した「焚き火」というアイデアは、小山田徹さんのヒアリングに触発されたもの。「焚き火には、人の営みとか集まる場所というニュアンスが込められていますよね。そこは暖かい場所であると同時に、手をかけなければ消えてしまう場所でもあり、その逆に大火灾の原因にもなりうる危険性もはらんでいる。決してキレイごとだけでは終わらない印象が焚き火にはあります」

同じく「火」というイメージを使いながらミッション候補を用意したのが宮崎さん。「"火種"が出会いに

よって灯る環境をつくる」という言葉には、「人と場所が出会うことで、人の中に『なにかやりたい』という内発的な衝動が生まれてくる環境を作ること。そして、その火種を持った人や関心ある人が出会い、火種が灯ることで、あらたな活動が起こる。そんな循環が生まれることによって、まちやコミュ

ミッションのためのキーワード

主体性	内発性	自治	自由	オーナーシップ	触発
場のあり方	循環	森	植物	生態系	弱目的
	仮設	人員配置	反施設化	失敗OK	(役割の)流動性
生まれる関係性	贈与	ホスピタリティ	愛		
関わり方	かも筋	みんなで困る	判断の手前	受容/安全	

ニティがだんだんとおもしろくなっていくはず」というビジョンが刻まれている。「遺産を寄贈した林雄一郎さんがかつて書いた文章に、『生き生きと懐かしみ、生き生きと悲しもうとする静かな決意』という言葉がありました。この言葉が、わたしには個人の中に宿る”火種”のように読めたんです」

同じく、林雄一郎さんの意志を想像した時に「演劇の力でなにをか動かしてほしいのではないかと」解釈した森下さんは、ミッションが目指す先を社会と個人とのふたつに分けて「ナラティブなコミュニケーションから生まれる人間関係がしなやかな人を育む ナラティブなコミュニケーションでしなやかな社会にシフトする」という言葉を提出。「いま、メンタルをはじめとして、コミュニケーションが課題になっていますよね。演劇を通じてこの課題を解決しながら、しなやかな人間や社会をつくっていくことがミッションになるのではないかと」解説しました。最後に、萩原さんが用意したのが「集まりの場をデザインすることを通じて、早稲田の森の温度を上げる」というミッション。こちらと同じく、小山田さんのヒアリングで語られた「森」のイメージに触発されています。「『都の西北』にも歌われている森を、文字通りの『森』と捉えました。そして、この森の温度が上がることによって、多様性が上がり、循環が促進されるのではないかと」思っただけです」

能動的ではない偶然の出会い

ヒアリング、ディスカッション、リサーチなどを通じて、それぞれの視点からまとめたミッション候補が出揃ったあとは、そこに共通するキーワードを抽出。「火」のイメージ、「循環」や「生態系」、「贈与」というニュアンス、あるいは「明るさ」。そんな共通点をまとめながら、宮崎さんのミッション候補をたたき台として、最終的なミッションを仕上げていくことになりました。

火種はどのようにして生まれてくるのか？ 火種を灯すためには火吹き棒も必要なのではないか。たとえばこはげ珈琲は、火の手入れを担っている場所ではないか。そもそも火種は、ひとつではなくて「たくさんの火種」なのではないか……と、ひとつひとつの言葉を丁寧に検討していったリサーチ部。すると、だんだ

んと、火を「灯すこと」だけでなく、焚き火のように「囲むこと」、さらにはほかの人々にまで火を「分けていく」ようなイメージが理想として浮かび上がってきました。

また、火と同様に、小山田さんのヒアリングにおいて話された「森」というイメージも用いることができそうです。とはいえ、森と火が同居すると、炎上してしまいそうなイメージが……。「火種」では危険だが、松明や焚き火であれば大丈夫かもしれない」

などと、喧々諤々の議論を通じて、だんだんと見えてきたのが、「早稲田の森に出会いから灯り、囲まれ、分けられていく小さな火を増やす」ということば。そこには、出会いによって火が灯り、この火が囲まれ、広がっていく姿というイメージが込められています。そして、受動態にすることで、能動的にそれを実現する意志ではなく、自然に起こってしまうというニュアンスが込められています。今回ヒアリングを行った人々も、どちらかといえば主体的に自らの活動に出会ったというよりも「出会ってしまった」というような感覚の人々ばかりだったのではないのでしょうか。

しかし、「出会い」という言葉は瞬間的な関係性のイメージが強すぎるのではないかと。わたしたちが求めている出会いは、継続した関係のなかでふと見つかるもの。そして、出會いたいという意志ではなく、「出会ってしまった」と表現されるような偶発的なもの……。いくつもの案を出しながら、最終的なかたちを議論します。

そして決定したミッションが、「早稲田の森にさまざまな火が灯り、囲まれ、分けられていく」でした。森の中に灯るいくつもの火が、自然に生まれ、広がっていく。この火が森の中を暖めたり、照らしたりしていく。そして、森の中は活気づいていきます。

さらに、このミッションだけでは包含しきれない概念を、サブテキストとして用意。これは、相互作用やリサーチ部で培った経験が余すことなく掲載されている呉宮さんのミッションを、ほぼそのまま使用することになりました。

こうして、ミッション策定に向けたリサーチ部の半年間にわたる活動は終結。今後は、言葉に込められた思いを伝えながら、学生、大学、地域社会など、さまざまな人々とこのミッションを共有していきます。

リサーチを振り返って

偶然の出会いから

萩原里砂

演劇をかじったこともなく、それほど観に行くこともなく、ましてや演劇論など戦わせたことの無い私がこのメンバーに入っているのか。6月から着任したばかりでどらま館が何なのかもわかっていないのに、大丈夫か。だが、おそらくこれは大学側の役職っぽい人間もいたほうが、なんか良い方向に進みそうな予感はある。それに、演劇界隈は触れたこと無い世界だからちょっと覗いてみたい、ということで、ご指名を断らずお引き受けすることにした。断らなかったあの頃の自分を褒めてあげたい。そのくらい私にとって充実した時間だった。中でもやはりヒアリングさせていただいた一人一人が、本当に魅力的だった。そのお話は印象的で、忘れっぽさが増している今の私の心にも、深く刺さる言葉と考え方、生き方だった。メンバーと一緒にただ話を聞いただけなのに、自分が少しだけ豊かになった気さえる。今までもこの先も出会うことの無かった人たちであり、言葉であり、考え方だった。それが、このコミュニティに入ったことで、これから先、私が何かで迷ったときに、ふと思い出し、背中をそっと押してくれるような言葉や考えに出会えたのである。さらに言うと、何か機会があれば他の誰かにも、この人たちの言葉や考え方を私を介して伝えていければ、なんてことまでも思う。すでに、こはぜ珈琲でボトルでコーヒーを買うようになり、それを同僚に分け与えている。今回を機に私の行動と嗜好が変わったのである。

そして今、思う。今回、私がリサーチ部で経験したようなことを、学生たちに経験してもらえるような場に、どらま館がなっていけばいいのだ、と。つまり、本人たちは予期していなかった偶然の出会いがあり、そこから自分の中でポッと火が灯ったり、その小さな火を誰かにも分けてあげたいと思ったり、ほんの少し行動や嗜好が変わったり、そんなことが行われているような場にどらま館をしてあげたいと思う。

私の好きなキャリア理論に「プラントハプスタンス」という理論がある。「計画された+偶然」という相反する言葉だが、計画された偶然に乗ることはその人のキャリア（人生）を豊かにする、という実証された理論である。そして、その偶然に乗るためには、「好奇心」「柔軟性」「持続性」「楽観性」「冒険心」が5つの大事な要素と言われている。例えば、私がこのメンバーとして声がかかったのは単なる偶然だったが、面白そうだから乗ってみるかと思う「好奇心」と「楽観性」、忙しさにかまけず時間をつくったあたりの「持続性」は自分なりに偉いぞと思う。偶然に乗ったからこそ、出会いがあり、少しだけ見える景色が変わり、豊かになった気もする。しかし、やはりここは単なる偶然ではなく、計画された偶然、つまり、おこるべくしておこった偶然でなければならぬ。5つの要素は、早大生自身に委ねるとして、我々はこの偶然をいかに計画するか、デザインするかが、これからの腕の見せ処である。偶然の動線をいかに敷くか、今回のメンバーはもとより、林雄一郎氏が出会わせてくれたプロジェクトの人たちとも知恵を絞り、実現していきたい。

早大生よ、早稲田の町よ、楽しみに待っていてほしい。うかつに足を踏み入れたどらま館で何が起こるのか、私も今から楽しみである。

場が呼吸しはじめるとき

呉宮百合香

今の活動の礎になっているものは何かと聞かれたら、間違いなく早稲田で過ごした時間が大きい。学部生の頃、授業で勧められた公演を片っ端から観にいったこと。複数言語を駆使して美学を論じる教授や、ある作品の一瞬がいかにも面白いかを熱く語る先人の姿に、理解はまるで追いつかないながら圧倒されたこと。何も決めずに飛び込んだ先に広がった出会いの数々が、予想もしなかった世界をひらいてくれた。「早稲田演劇のために」——それは私にとって、大学という研究・教育の場だからこそ果たする役割を、演劇・劇場の発想を手がかりに改めて考えることでもあった。

思えば、大学という環境と、私が日々身を置く稽古場には、よく似たところがある。どちらも、正解のない問いを引き受け、わかりやすい成果にはすぐに結びつかない時間を必要とする場だからだ。未完成のまま考えること、試すこと、寄り道すること、まだ名前のない問いを抱え続けること、他者の力を得ながらも、ある種の孤独に向き合い続けること。どこに行き着くかまだわからない、しかし確かに豊かなこの時間を、いかに公共的な価値へと接続していけるのか。こうした個人的な問題意識から、本リサーチにおいても、物理的な場を媒介に、どのような関係や創造の条件を育てられるのかという点に特に関心を寄せていた。

今回ヒアリングでお話を伺った方々はいずれも、強い構想力や独特の吸引力を備えた、いわばカリスマ的な存在だったと思う。だが同時に、なるべく「人」ではなく「場」の方へ重心を移そうとしていたことが何より印象深かった。場を自らの分身のように抱え込むのではなく、そこに関わる人が少しずつ引き受けられるように設計する——つまり、場がひとりだけで呼吸しはじめるための条件を整え、そのための責任こそを負っているように感じられたのだ。

では、その条件とは何か。たとえばそれは、答えを先回りせず、みんなで困ってみること。何者でも

ないまま居られること。雑多な者同士が集う面倒さを排除せず、そこに起こる摩擦をも許容すること。単に「居心地のよい場」ではない、安心と緊張を共存させる胆力と設計の知恵が、創造力の芽吹きを静かに支えていた。そこでは、誰かが上から導くのも、答えを示すのでもない、根気強く待ち、見守り、ときに火守のようにささやかに手を添えるあり方が大切にされていたように思う。

もうひとつ身にしみて感じたのは、名付けによって価値観は共有可能になるということだった。歴史や身体感覚を伴った言葉は、場の手触りや価値観を、相手の心身にスッと響く形で手渡すことができる。逆に言葉が痩せれば、場の輪郭もまた痩せてしまうのかもしれない。「のきした」「カモ筋」「焚き火」——ここにすべては挙げ切れないが、対話のなかにちりばめられていた数々の言葉は、軽やかに柔らかいながらも、思考と感覚を起動させ、世界の解像度を変えてしまうようなパワーを持っていた。

願わくば、私たちがたどり着いたミッションもまた、そうしたものであってほしい。ここから先、それぞれの現場で灯り、分けられていく最初の火種として。

この世には、あと5倍くらい演劇が必要だと思う

萩原雄太

この世の中には、演劇がもっと必要だと思っています。具体的にはあと5倍くらいの演劇が上演されることが望ましいと思います。10倍とやりたいところですが、控えめに、まずは5倍と言っておきましょう。この世には、演劇が少なすぎる。

でも誤解しないでほしいのは、ここで言う演劇とは舞台の上で行われているあれではありません。もちろん「舞台の上で行われているあれ」も演劇だし、それが増えるのはとてもいいことだと思います。わたし自身も、舞台の上で行われているあれの演出をしています。しかし、あれは数ある演劇のうちのひとつでしかない。「舞台の上で行われているあれ」のみが演劇だと考えているのは、マクドナルドのハンバーガーだけがハンバーガーだと言うようなものです。モスやフレッシュネスだってもちろんハンバーガーだし、パンにハンバーグを挟んだら、それはもうハンバーガーです。それと同様に、人が集まって、日常とは異なった時間が流れる場所で、自分とは少し異なった体験を味わえるならば、それはもう演劇と言っていい。演劇は、いろんなものをそれに含んでしまえるような、ゆるゆるでがばがばのものではないかと思っています。

いつでも、誰でも、演劇をしている。

今回、リサーチ部でヒアリングをした方々は、それぞれがそれぞれのフィールドで「演劇」を行っている人々だと思います。そこには「舞台の上で行われているあれ」と直接関係する場所もあれば、ピッコロようちえんや抱樸のようにまったく関係のない場所もある。わたしは、かれらがやっていること全てが演劇であると思うし、それが演劇でないならば、演劇など減ってしまえばいいと思っています。

演劇とは、それをめぐる産業や界限のはなしではありません。シェイクスピアのあらすじを知ることではないし、能舞台にある柱の名前を覚えることでもない。それは、人が、人ともにどう暮らすかを描くものです。そして、日常とは異なった時間の流れ

方やその流し方の問題です。演劇は、いつもの自分とは少し異なった時間を味わう場所です。

この視点を持つことによって、世界の見え方は大きく変わるでしょう。いま、どのような劇がわたしを取り巻いているのか？ この空間には、どうしてこのような時間が流れているのか？ どのように人は集まっているのか？ どのように、内発性が刺激されるのか？ 演劇という視点を手に入れることは、そのようなことを理解する助けになります。そしてそれは、あなたを不自由にするものをめぐる問いになる。つまり、演劇を手に入れることは、個人のレイヤーでいうならば自由を手に入れることだし、集団のレイヤーで語るならば、共同体が自治を手に入れることです。

いま、わたしは演劇という知恵のはなしをしています。

演劇という知恵を手に入れたらとても楽しいと思います。それは、わたしたちの手で自由を手に入れることであり、世界を変えられることを教えてくれるからです。それは楽しいだけでなく、豊かだし、かっこいい。

このミッションを読んだあなたが、誰かがやっている演劇に気づいたり（自分を含む誰かが見ることによって、演劇は生まれます）、あなたなりの演劇をはじめてくれたら（自分を含む誰かに見せることによって、演劇は生まれます）これ以上嬉しいことはありません。この世の中には、あと15倍くらい演劇が必要です。

「信用」の設計から、「信頼」の生成へ

宮崎晋太郎

私にとって今回のリサーチは、「ある場所がその人にとって意味を持つとはどういうことか。そして、その場所に意味が堆積していくとはどのようにして成されるのか」という問いから始まった。

現時点での答えは、それは「信頼」によって生まれるのではないかと感じている。

信用できる場所はたくさんある。しかし、信頼できる場所はそう多くない。信用と信頼では、「信じる」ということの位相が違う。信用は、過去の実績や制度といった条件によって担保されるものだ。

一方で信頼には、計算を超えた、根拠のない未来を共に引き受けるような付き合いが生まれる。たとえば、何度も通ううちに言葉にしなくても通じるものが生まれる関係や、失敗してもなお離れない関係。それらは「条件」ではなく、互いの「応答」によって成り立っている。

インタビューの中で繰り返し浮かび上がったのは、ひとと場所との関係は、「教える・教えられる」という構図で身に付けるのではなく、その関わりの中で「つくる」、「生まれる」という感覚だった。

それはどこか、農業や漁業のような自然を相手にする現場で働くひとの視座を想起させた。自然と対峙する人間は、完全に管理された安全の中にいるから価値を得るのではない。

むしろ、天候や潮の流れといった「ままならないもの」の中で、自ずからそこに働きかけて生きる糧を得る、その絶え間ない往復運動の中で、自然（場所）と自分との間に、ある固有の意味を受け取っていくのだと思う。

今回インタビューした人たちがつくっている集まりも、あらかじめ信用される装置を整えることより、日々の泥臭いやり取りの応答によって、信頼が「立ち上がってくる」プロセスを大切にしていた。

インタビューの中で、その技術と態度について多

くの示唆をいただいた。

次はそれを受けて、早稲田でどのように実践するか、応答する番だ。

もうひとつ、私が場について考えるときの物差しに「飲み屋」がある。

私は飲み屋が好きでよく行くが、そこに再び訪れるかどうかは、その店に「気合いが入っているか」をひとつの判断基準にしている。

ここでいう「気合い」とは、接客態度や清潔感のことではない。出てくる料理、集う人、それらを取り巻く空間との関係の取り方に固有性が宿っている状態のことだ。

そこに強く惹かれるのは、それが「そこで作られたもの」だからだと思っている。

物にも人にも空間にもそれぞれに固有の価値はあるが、そのつなぎ方によって、価値は最大化もされれば半減もする。

私は、そのあいだをつなぐ作法の中に、人間の営みや文化を感じている。

「つくる」という行為を通じて、人間がこれまでつないできた感性の回路がそこに現れる。店に身を置くと、私はその場所を通じて、「あなたはどうか生きるか」と自分の感性に問いを投げ返されるような共振を感じる。

こうした共振が起こる場所や人を、このリサーチの中で私は「火種」や「火」と呼んでいた。

それは用意された暖房器具のような便利さではなく、一人ひとりの関わりという摩擦から生まれる熱そのものである。

これから早稲田に新しくつくられる場所は、その「火」を守る場所であり、そこに自然と人が集まるような領域だ。それを今から想像している。

早稲田の森に棲む「One Piece」として

森下ことみ

もともと芝居を観ることが好きでした。20代後半から30代は暇にまかせて歌舞伎・文楽を中心に劇場に通いました。当時からうっすらと「演劇の力」について考えていたような気がします。そしてコロナ禍、不要不急の外出の自粛が求められ劇場での公演はことごとく中止に。そのときにも「演劇の力」について考えました。世の中に演劇というものがなくても生きてはいける。でも演劇のない世界は、なんと頼りのないことかと。それはなぜなのか。その答えを今も探しています。そんなこともあり今回、本プロジェクトにお誘いいただき「これは『演劇の力』で、学生たちを、人々を、世の中を、豊かにしていこうということなのだ」と感じました。

これも薄々とはありますが「早稲田といえば演劇」というイメージを持っていました。2018年に配信を始めたWEBメディア「高田馬場経済新聞」を通じた活動で、それは確信に変わりました。そしてこの長い歴史を持つ早稲田の演劇文化がもっと世の中に認知されるようにと関連記事に「#早稲田演劇」を付けるようになりました。

本プロジェクトは、「演劇の力とは？」という問いを解明する、「#早稲田演劇」の発展を加速させるという私的なミッションの遂行でもありました。

プロジェクトが始まり、人々が集まる場を運営する方々へのヒアリングを通して、このプロジェクトは場づくりのプロジェクトだと認識しました。それはコワーキングスペースの運営者としても興味深いことでした。13年前に高田馬場にコワーキングスペースを立ち上げた時の思いは「クモの巣状の緩やかなつながりがあり、リーダーやコミュニティーマネジャーを介さず、必要な時に必要な人にアクセスできて、誰かに助けられたり、誰かを助けることができる場を作りたい」というものでした。極端に言えば「人の一生は、いつ、だれと出会うで決まる」とも思っています。実際、コワーキングスペースの運営や高田馬場経済新聞の取材を通して、この街で

出会う人たち同士をつなげていくだけで、小さく未来が変わっていく様を体現させていただいていると感じています。

ヒアリングを通して私は、古い時代の「共同体」や「コミュニティ」とは異なる場作りにキーパーソンとして関わる方々のお話を「それでいいんじゃない」という私自身へのメッセージとしても受け止めました。そういう意味で今回策定されたミッションは、私自身の人生のミッションでもあると感じています。

願わくば、私自身も早稲田の森に棲む「One Piece」として生息し、火種をみつけたら火吹き棒で「ふーふー」したり団扇で煽ったりできる自分になりたい。もちろん、私自身が火種となる未来を想像することも許されているとも思っています。

「早稲田演劇」のためにと林雄一郎さんが灯された火を絶やさぬように煽り豊かな森を育む。そして、この営みがまた新たな灯の種となり循環、継承されていく未来のために。

集まり方を試す場として

吉田恭大

これまで職員としていくつかの劇場で働いていたが、前職の5年の任期のうち後半はコロナ禍の対応に追われ、一瞬で過ぎていった。パンデミックの状況下では舞台芸術の現場に限らず、人と人がコミュニケーションすることそのものの価値が否応なしに問い直されることになった。個人的にも、現場の人間の一人としてこれからの劇場の在り方を探しながら、答えが出ないまま任期を終えた。

2023年秋にどらま館の劇場制作マネジメントを引き継ぎ、早稲田演劇の状況をリサーチしてみると、多くの団体が「人と集まってクリエイションすること自体の困難さ」に直面していることが分かった。サークル活動として、主体的に集団創作を選択した筈の学生たちにとっても、誰かと集まること自体のコストがとても高くなっている。コストが高いからこそ、クリエイションに失敗が許されない、というような状況の切実さもそこにはあった。

どらま館としては、ハラスメント防止の研修や実践的なワークショップなど、学生サークルの活動に併走するようなプログラムも実施していたが、一方で、現状への対応策だけでなく、もっと長期的かつ広い射程で事業を考えることの必要性も感じていた。あるいは、演劇サークルに入っていない圧倒的多数の学生や地域住民、普段演劇に触れない人に対して、早稲田にある劇場が出来ることは何だろうか、とも。

今回のプロジェクトは、演劇や劇場、ひいては人と人が集まることの意味を、自身にとって改めて問い直す機会となった。リサーチでお話を伺った方々は、個人としても、また場の設計者としてもそれぞれとても魅力的な取り組みをしていて、コミュニティの作り方や、他者と関わること自体に独自の哲学や実践的な技術があった。人が集まることに対するポジティブな期待と身軽さがあり、あるいはその裏返しとして、集まらないことや離脱しやすいことも設計のうちに組み込まれていた。そこでは選択肢

の多様さ自体が、場に対するコミットのしやすさにつながっていることが分かった。

どらま館は、サークル活動の一拠点として、また学生街の劇場として、あるいは大学の施設として、学校教育と社会教育の両方の射程を持つ場所として、さまざまな断面のある場所であり、さまざまな立場の他者と関係性を取り結ぶことが出来るポテンシャルがある。先行する優れた取り組みを目の当たりにしたことで、その価値を改めて貴重なものだと感じる事が出来た。

ここに集まって何かをする。あるいは何かしなくてもいいし、集まらなくてもいい。コミュニケーション自体を目的にする、あるいはそれを選ばないという選択も含めて、身軽で迂闊な選択肢を提示したい。そのための場所として劇場をきっかけに使いたい。そして、そのような取り組みを、この街の多くの人々がめいめいに始めることになったら、それは一つの森、大きな生態系としてとても豊かなものになるのではないだろうか。

林雄一郎基金
ミッション策定のためのプロセス
報告書

2026年3月31日発行
編集・執筆：萩原雄太
発行：早稲田小劇場どらま館